

川柳雑証

麻生路郎★主宰

誌柳刊月の威權高最
燈識標の強勉生人

本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

正十三年三月三日第三種郵便物認可 昭和十四年三月十五日發行 第十六卷第三號 毎月一回十五日發行

(員動流刺縛民國) !! に後銃は等我 !! に銃類はと兵 *



14/3

182

號三第 卷六十第

行發日五十月每

本社三月例会

技を磨くに好適のシーズン先進後進の別なく來會されたし

18日
夜6時半
(土)

★會場 警得寺 (電話南四八八六)
市電清水町電停一丁北ノ辻西入

★茶題 「離祭」(三句) 藤生霞乃選

★柳話 「れんこ鯛」(三句) 高橋かほる選 藤生路郎先生

★會費 三〇錢 (川協章提示の方は二五錢)

★呈賞 天位(各題)に粗品を贈る

幹事・潮花・豆秋・香水・双虎・紫香・水客・里十九

大阪市西區江戶堀上通二ノ四六(昭和ビル)

川柳雜誌社
電土佐堀三三三・八一六三・八一六四番

松坂俱樂部三周年記念川柳大會

松坂俱樂部が創立三周年になりますので、四月十四日から二十日迄展覽會を開催することになりました。その會期中に左記に掲げ記念川柳大會を催します。どなたでもお越し下さい。

★時 日 四月十六日(日) 午前十時 午後三時

★場 所 大阪日本橋筋三丁目 松坂屋百貨店中八階 梨の間

★茶題 「商品券」二句 藤生路郎先生選

★會費 金三〇錢 「マネキン」二句 長崎柳秀先生選

★呈賞 各題天地人に粗賞を呈し、なほ出席者を松、藤、柳の三組に分ち優勝の組に團體賞を呈す。

幹事 美根子・耕二・白面人・孤蓬

三華・くもを・生々庵・尙志

松坂俱樂部川柳講座

／る募を員社

二十才より三十才までの方。
男女を問ひません。
採用 編輯部・營業部 二名。
履歴書(寫眞と共に)郵送の事。
面會日追つて通知致します。
手當其他委細面談の上。

大阪市西區筑前バス電停前
昭和ビル二〇一號室

川柳雜誌社



★

パーマネント

は

大阪・心齋橋筋周防町角

ナショナル

山口倫子 經營・電南992

B.7圓 A.10圓

- ・シャンプー
- ・セツト
- ・附屬共

／著快る送を笑爆へ後銃へ線戦★

新川柳評釋

著 郎 路 生 麻

戦線への慰問品は……

随分御苦心なさいます。何處をどう廻つて行くか。幾日かかるか豫定がつかないので、毀はれ易いもの、腐敗するものは全然駄目です。その點本書は斷然最適の慰問品として戦地で喜ばれてゐます。即刻お送り下さい。

本書は本誌に連載され名評釋として好評噴々たりし「川柳評釋百句」及び「川柳名句評釋」の二篇を合纂したるもの、評釋の輕妙さは日本柳壇に於ける著者の獨壇場である敢て應む。

★ 四一紙 フラ稿質上版六四

★ 錢八十八地外他のそ 鮮朝・洲滿 錢六 送料 錢十八價定

六三ノ三通本出玉區成西市阪大

洞 朽 不 所行發

番二九三〇三阪大替換

留守部隊の戦線異状なし

没食子君の留守宅は今里公園の近くにある。君は藥劑士だが宅は「さくら」といふテイルームだ。ドアを排して入る。誰もみられぬ。正面の壁には軍刀と鐵兜へ櫻を散らしたボスターが貼られ、それに新武運長久の文字が見られた。

奥からM・R・Sのユニフォーム姿のベースマンが陸續と出て来る異風景に、これはどうしたのかと思つてゐたら、饒て奥さんの清子さんが出て來られた。

月刊雑誌を編輯してゐる月日に追ひまわられる。多忙に次ぐに多忙で落ちついて珈琲を啜るひまもないが、そんな中からも愉快な時間を見つかるものだ。戦線で戦つてゐる川柳勇士の留守部隊の訪問をして戦線との連絡を計るのも一つだ。本號では川柳雑誌社の不朽洞會員市湯没食子君の留守宅を訪ねた。

★



（氏堂製靜川小佐中醫軍隊）達傳帶繻賜恩るけに隱衆★

「どうです。お元氣ですか」

「ハイ有難うございます」

「あちらから便りがあります」

「時々あります」

「今の人たちは？」

「あれは、こゝの市場の方ですが、今日の

お休みに土地會社の

グラウンドで野球

の試合をされるので

す。妾のうちで衣裳

つけをして行かれま

すの……」

奥さんの説明でなる

ほどとなつてた。

「何か變つたことはあ

りませんか。猫が仔を生んだとか

何んとか」

「妾のうちでは猫も犬も飼つてゐま

せんが、妾に子どもが出来まし

た」

「イヤ、それはお芽出度う。どちら

です？」

「女の子ですの、主人が出征する時

は、まだ判つてゐなかつたので

す。妊娠のことを知らしてやりま

したら、男の子だつたら光（ひか

る）と名をつけるやうに、女の子

でしたら妾に任かすと云つてまゐ

りました」

「それで、お名前は？」

「二月八日に生まれましたが晴子、

（せいこ）とつけました」

「それはいい名ですね。それで留守

守をしてゐらつしやるのは？」

「長男の久介（ひさかづ）（四ツ）と

お父さんの松之助（五九）と主人

の弟の久司とです」

君个久男長の君子食没



そんな話をしてゐるうちに奥さんは赤ちゃんを抱いて來られた。

「大きな／＼子を産んどきますと云つてやりましたのにこんなに小さな子なんです」

小さく産んで、大きく育てよだ。特に小さい譯でもないが、そこは親心だ。一つ寫眞を撮つて戦線へ送り届けやうと、ポケットから玩具のやうな小さなカメラを取り出した。

技師が下手糞ですから、寫るかどうかかわかりませんよと自信のない駄目を押してパチツ／＼とやつて歸つたが、焼付けて見ると案の定、藝術寫眞のソフトフ

ォーカスだ。判ることは判るといふ

ポートレイト、誌上發表は見合はせることにした。

「御商賣があつては大變ですね」

「ええ。妾が店のことが出来なくなつてからはお父さんのサービスボーイですの」

これでは留守部隊もなか／＼樂ではない。

しかし、健康でさへあれば、共に／＼興亞の春は巡り來るのだ。

「からだに氣をつけて、ウンと頑張つて下さい」

と云つて辭した。

陣中よ

子食没場市

誰可する歩哨の聲が鐘に似る

寄せ書の國旗初日に翻り

陣中閑手相骨相字劃なき

インテリのくやしけれきも兵は兵

川柳雑誌

三月號

表紙寫眞……大同・石佛……岩崎柳路

反蔣のボスター……麻生路郎（三）

留守部隊の戦線異状なし……（一）

身體髮膚……岡田某人……（三）

詩人……交叉點の悟り……高鷲亞鈍……（八）

肥後訛り……櫻川不水……（三）

武玉川三篇研究（三）森東屋（三）

近作柳樟から……福田山雨樓……（二）

裏を行く……小西落丁……（三）

東京だより……銀座鳥……（二）

街に住めば……高橋かほる……（二）

蒙古の俗諺……濱田久米雄……（三）

おむつ……市場没食子……（二）

近作柳樟……麻生路郎選……（六）

川柳塔……堀口塊人……（八）

大將……村松夢裡……（八）

集路……（一）

各地柳壇……（一）

同情週間川柳大會句報……（四）

後記（三）……社關係の人々……（三）

柳界展望……（三）

川・協……（三）

柳人素描……（三）

（三）小川雷百君……（三）岡田某人君……（三）

シカゴ……（九）

「シカゴ」を観る（句）……後藤青兒……（九）

爆音……奥村丹路……（九）

歌舞伎座見物……戸田孤蓬……（九）

角座を観る……高橋かほる……（九）

……姫田夕鐘……（九）





川柳塔

路郎選

大阪 橋本緑雨

突進のニュースに見が見當らず

皇國の佳節歩きませう

風強く焚火に顔が火照るなり

大阪 高橋かほる

關西線水兵さんは編んでる

日が暮れに豆腐を買ふた子が走り

姪養子を迎る

洋服筆筒養子の年は二十八

丸額に先輩の字が古くなり

横濱 福田山雨樓

書き捨てた茶掛けを一茶値踏され

ビツコの子やさしき母が眼に浮ぶ

往年の競輪長の顧客A君スターとなる

男振り映畫でお目にかかるこせう

大阪 奥村丹路

ビルを背に陽はこゝにあり靴磨

エレベーターの小女斯くして貧に堪え

首筋の細さもほそし宮仕へ

戀の人いつそ無口をいこしまれ

二ヶ月の陽をたいせつにものを干し

聖家口 岩崎柳路

捺印の課長吹殻ほこさ落ち

時局柄猥談なごはよし給へ
二ア人は巡査の前を小さく行き
櫻は櫻僕は働く作業服

兵庫縣 寺井銳々

愛嬌もチョツペリある署長さん

こもかくも銀行へ用のある身分

食堂車だけが起きてる汽車が着く

靴磨でもする氣だこ見えた嘘

松原の雨順禮の笠が濡れ

兵庫縣 水谷鮎美

影―某月某日。性は善なり

藥より大事な金は掌を逃けて

ストープのはたでテストをされてゐる

肌ぬぎになる名人の鉋屑

大阪 姫田夕鐘

角帯で行く用のある岸の里

ゲリラ戦綿解禁へあわてこみ

なんまいだローブウェーの人こなり

大阪 大西八歩

きざみ喫ふ指も心も世帯馴れ

いつち好きなが六人あるこ妓云ふ

云ふ事も無く老夫婦箸を置き

禁酒して何の病氣で死ぬつもり

靴音にまでも歸朝をにほはせる

子こならぶ父のオーバの裾は切れ

苗植えて家運の程をうたがはず

娘だけ着かざる母子のあはれ

めしこライスめしは淋しい繩のれん

大阪 西 いわを

無帽主義國策線に添ふ心

銀狐妻の虚榮は程遠し

お嬢さんスキーを持った立姿

北山の時雨彼の娘の目がうるむ

大阪 後藤青兒

櫻散る里に遺骨の着く知らせ
ウギ／＼こ櫓の音がして春の海

南支 宮岡白峯

風呂敷の要らぬ土産もたんこ出来

髭一つちぎつた彈丸の速さ哉

日章旗建て、支那街敗けた街

大阪 中西おさむ

春の雨肩のあたりへ聲をかけ

ハンカチの白さ藝者はむせてゐる

テールブルの赤さへこほす支那の酒

カフェー組と別れてからの道遠し

かんざしを一寸氣にして藝者立ち

大阪 加藤ライト

お世辭／＼壽命のこゝにまでも觸れ

せんべい蒲團へつのる病勢

氷點下もう目さましは遠に鳴り

豊中 黒川紫香

お馴染を呼んで社用の金を出し

猫の戀餌は鼠が貰ひに来

爪先を犬がなめてる立話

大阪 丸尾潮花

病床へ春のうす陽がふこ淋みし

見舞客藥の用を言ひつかり

十二時のサイレンを聞く水藥

大阪 大坂形水

万の附く儲電車で話してた

良い醫者に掛かれぬころへ家を建て

ブラットの御靈にすまぬ車窓ごし

大阪 岩橋双虎

目を見ろこ云はれ見たのも眼なりけり

石清水弓矢を買ふて子を連れて

長男に生れ米屋になつたゞけ

大阪 野本 吞水

大和男子の母となりたる寐息なり

病欠の届一度は疑はれ
頂戴々々焼芋車を追かける

大阪 岡田 某人

バーテンの中から莫迦な世をながめ
ほつさけ云ふのに女拂ふて来
旅がらす一應驛をまこにも出

尼崎 酒井 斗風

實印のそうじ子供はのぞきこみ
陽があたり店で利潤を聞かされる

山莊へ祖母さ住んでる銀狐
防波堤釣れず軍需の煙見る
消毒の匂ひ春陽の看護婦よ

兵庫縣 増元 翠陽

バット買ふ度に献金したつもり
命日の髭剃りへうかぶ父の顔
たはむれに乳首をはなしては飲まし

兵庫縣 田邊 由布

生駒さんアナありがたやお茶ばしら
姑娘も日本語うまくなつて春

赤鯛焼く手達者な皺の母

兵庫縣 長崎 柳秀

甘言へうつかり乗らぬ固い膝
來年を見越した服を子はきらひ
義理づめでわかれた方のいゝ噂
これしきの慰問にすまぬ舉手の禮
帯解いて女中一ト日を疲びれる
職業をはつきり顔に煙突屋

中支 植山 九天

葦輪に吹けば故郷の山や川
誰れの時計が合つてゐるのか夜が冷える
かたかなの便り鉛筆なめたあこ

鳳凰城 菊川 泰平樂

茶屋酒にまこま淋しき四十六
甘やかす子に似た犬の顔をよけ
おさな名で呼ばれ活きてるうれしさよ

滿洲 風物

高脚の踊り春聯靜かなり
匪賊出ぬ今日今頃の物淋し
高脚踊り匪賊に似たる顔のあり

長野縣 金井 有爲郎

母さ部屋一つに寐ればかろき夢

雨だれも一直線に光る春

金のこま紳士の言葉けものめく

今治 渡邊 曉童

海の人山の人へ元旦の陽はうれし
寒行の電車を待つ間火を入れる
銀行の宿直さいふおそろしき

廣島 濱田 久米雄

退廳の小脇に趣味の本があり
獨酌へ鯨の肉がもう見えす

水溜り女の裾がさばかれる

幸福はごんなものか齒を磨き
電車賃あこ銅錢があるばかり

愛媛縣大洲 今川 棕影

電話なる不吉な豫感床を出る
談論風發たゞそれだけのこま

御亭主へ勝氣な妻さなつてゐる

神戸 潮田 明坊

勝つてくる決意上座へ据ゑられる

恐らくは死目に會へぬ汽車に乗り
差下駄の音たてゝ來た出前持

蒙古の俗諺

☆ 卒直な心を自然から享けたものは變心しない。

☆

戦争の時は鷲が獲物に飛びかゝるやうに突

撃せよ。

☆

誰か草の成長を妨げることが出来やうか。

☆

生れる者は必ず死ななければならぬ。

☆

☆ 陽に従へば寒くない。喇嘛に従へば饑く

☆ 日向から日蔭に行くものではない。

☆ 善惡には恩と仇が影の如く従つて行く。

☆

言葉の神酒を飲む。

☆

富者は威張り、勇者は法螺を吹く。

☆

一つの宗教には二人の祖師なし。

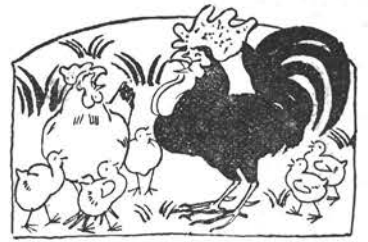
☆

☆ 見知らぬ帝王は虎。見知らぬ土地は地獄。

☆

☆ 鳥は自己を容れる巢を捜し當てる。

☆



武玉川三編研究

(二七)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚 屋
蛭

(480) 雞のなみたのかゝる組板
省 二 雞を丸のまま料理して居るのは、殺生のやうな思ひがする。

東 魚 雞そのものが涙をこぼす様に思はれる。結局見る者が可愛さうに思ふ事になる。芭蕉の『行春や鳥啼き魚の目は泪』があるから、雞そのものの涙とみてもよろしからう。

秋の屋 〓私は東魚君説に左祖する。

省 二 無論、私解も同様なわけで、「雞に」でなく「雞の」だから、雞の涙と解しての上の事である。

(481) 仲人か来て笑ふ神主

省 二 若い者の前で神妙にしてゐた神主も仲人が来て笑ふ。

東 魚 世間話から遠ざかつて居る神主が、仲人する者が来て婚禮の日取などの相談をうけたりする場合もあるか。

秋の屋 〓江戸時代に於ては、神前で結婚式を擧げるといふ事は、決して無かつた。

(482) 戀にひかれて若いかんきん

東 魚 〓其後に來る戀の場面の楽しさがあればこそ、若い身で看經もする。そして老人の目をぬく手段とするのであらう。

秋の屋 〓若後家を張りに來る、謀叛人かとも想はれる。

省 二 〓私も若後家關係と思つてゐた。東

魚氏説も面白し。

(483) 奈良の三日は一生の損

東 魚 〓木辻などで遊んで、なまけ癖がついたと云ふのか。

秋の屋 〓三日に限つた意が判明しない。

省 二 〓大酒三日腰が立たず、などいふから、木辻の豪遊三日腰が立たなかつたのである。足ることを知らず息子は三日居る。『三日目に戻る秋に馬の糞』。

東 魚 〓乞食も三日すれば忘れられないと云ふから、習慣のつく目安に三日も考へられぬ事もなからう。

秋の屋 〓例の集林子の、「冥土の飛脚に、
「奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜をあかし云々」と、有名な文句があるから、三日と限定しても差支へない歟。

(484) 傾城の怪ふ所に夜はなし
省 二 〓不夜城といふ。

東 魚 〓大まかな云ひ方が良い。

秋の屋 〓嫌味の無いかはりに深味を無い句である。

(485) 旅ても茶屋は生た物いゝ

省 二 〓茶屋が死んだ物いゝでは商賣にならぬ。

東 魚 〓世辭もよし朗らかな気分を、「生きた物いゝ」と云つたのであらう。

秋の屋 〓邊鄙へ往くと質朴なばかりで、一向に世辭といふ事を知らぬ。茶屋旅籠屋もあ

る。

(486) 純子は縋子の若い兄分

東 魚 〓純子の方が立ちまさつて居るといふ丈け、又、布の工合も同系に屬すると云ふ心持ちであらう。「若い」は美しい気分と思ふ。

秋の屋 〓如何にも縋子は、純子の上に立ち難い。「若い兄分」は面白い言ひ方である。

省 二 〓前句關係で詠まれた句。獨立句としては内容が乏しい。

(487) 鼠の瘦に這入新ノ藏

東 魚 〓新しい藏には、餌になるやうなものがない。それを「瘦せに這入」と云つたのであらう。

秋の屋 〓故意に鼠が瘦せに這入るやうで、面白からぬ句であると思ふ。

省 二 〓理屈臭さはある。

大晦日もうばはうきもの

省 二 〓元日を心待ちする乳母らしい心情。

東 魚 〓子供の外に用のない乳母であるから、大晦日は子と共に翌日の元日をのみまち喜ぶ。

秋の屋 〓「大晦日」は、おぼつこもりと訓む。

(489) 志賀のむかしを近く言なす

省 二 〓志賀の昔とは天智天皇時代の事。それを色々と物語りするを「近く」と強めて居る。

東 魚 〓昔をまざくと思ひ忍びやる話を「近く言なす」と表現したのであらう。

秋の屋 〓多くの古都の中でも、志賀の都は有名であつて、和歌にも屢々詠まれてある。

(490) 今度も女伯母ひとり譽

東 魚 〓生みの親は、今度は男の子を願つてゐたのに、又女の子だと喜びの中にも失望があるのだが、伯母さんは、たゞ、可愛い者が殖えた事のみ喜ぶので、恐らくまだ自分

分は子を持たぬ伯母であらう。

秋の屋 〓不心得の伯母御は、徴兵に取られる心配が無くてよい、などと云ふ。

省 二 〓伯母らしい思ひやり。

(491) 平騒のうこくうたゝ騒

東 魚 〓物によりかゝつて、面をふせて、うたた寝をしてゐる姿が思はれる。平もつとひが白く目立て時々うこくが見える。そこに微風の渡るのを連想してもよからう。

秋の屋 〓靜中の動で、面白い見附けのものである。

省 二 〓平が動く、うたゝ寝であつて歟。

(492) 河風を串にさゝはや御被川

省 二 〓東帯で蒲焼をやく御被川。角田川でも行はれたが、賀茂の水無月寂などは最も有名。五十串をたてゝ修されたといふ。

東 魚 〓河風のすが／＼しさを打興じた處が、句のヤマである。

秋の屋 〓串にさゝばやゝは、大いに技巧を弄した痕がある。

(493) 懐の子をゆり起す願解

省 二 〓子の爲に願を掛けたのだから、眠らしたまゝでは願解きならぬ。

東 魚 〓願が叶つて願解きするのに、當の本人が眠つてゐては神様に申譯けなく思つてゆり起すのも流石に親心である。

秋の屋 〓女親の細心がよく表現されてゐる

(494) 樹の上で追人の者の小言聞

東 魚 〓本人はびく／＼しながら、微笑を禁じられぬ處であらう。

秋の屋 〓演劇の一場面とも見られる。

省 二 〓茂つてゐて姿をかくすに十分。

(495) 警固の杖の黄はむ六月

東 魚 〓炎天の警固に、白木の杖も、やがて黄ばむのであらう。

秋の屋 〓手の油汗で黄ばむのであらうが、これは杖よりも棒の方が適切であらう。



松坂俱樂部

會員募集

川柳講座

川柳雜誌主幹

麻生路郎先生 擔當

御申込

七階松坂俱樂部 電話(代表)三〇〇三番

松坂屋

大坂 日本橋

あらゆる趣味のお稽古場

手はごきから奥義まで
氣軽く、楽しく、御上達

- 省 二 棒がよい。例へば番所六具にも棒がある。
- (496) 強力を先へ押出す丸木はし
省 二 先づ強力に試渡させてから。
東 魚 押出すに、皆々他の者が尻込してゐる心持ちがうけとれる。
- 秋の屋 押出すで、後より多人數が續行する光景が想像される。
- (497) 古郷は木綿の強い計也
省 二 見る所もなく、食ふ物もない田舎であるが、木綿文は丈夫だとは面白い。
東 魚 古郷をなつかしむ氣分が、却て出て居る處が良い。
- 秋の屋 三河木綿、河内木綿など。
- (498) 櫻草にて過る中陰
東 魚 身内に不幸があつて、花見にも出られず、慰めるものに鉢植の櫻草などで、中陰を過してしまつたと云ふのかと思ふ。
- 秋の屋 花に浮かれて居る世間と異り、靜肅に四十九日を過したとである。
- 省 二 櫻草賣から買つた時の心情を思ふ馬を呵るに馬士の一壁
- (499) 東 魚 大聲に一聲、ドウなど云ふ場合。要を得た表現である。
- 秋の屋 鶴の一聲よりも馬士の一聲。
省 二 馬は犬よりも人語を解するとか。
關守の手を洗ふ黒髪
- (500) 省 二 女の通行人を調べる。
- 東 魚 女の通行人は髪を解いて、調べをうけるのであつたと思ふ。前説の通りである
- 秋の屋 關所には髪を調べる女が居て、それが通行の女の髪を検査するのだが、髪を一々に解くまでもなく、形式的に調べたと云ふ
- (501) 傘提るひより見の伊達
省 二 伊達は軽く解したし。サアどうだらうと傘を片手に仰ぎ出て行く。
東 魚 天候を良く見當てる人が、得意氣に、今日はあとで雨になるぞとばかり、傘を提げて出る場合。川柳の「日和見のみそげで傘をさげて出る」と同じ意味合と思ふ。
- 秋の屋 伊達は誇大であるが、そこが此句のやま敷も知れぬ。
- (502) 空也寺ひやうたんのなる垣を結
秋の屋 空也寺から出る鉢叩も瓢を携へ、空也念佛を勤行する時にも瓢を叩く故、此寺の必需品である瓢を作る垣を結ふとである
東 魚 さうしたら丁度良いといふ心持ちを、恰も事實ある如く云つた處が句の興味である。(本當にあるかも知れぬが、それは何れでも良いのである。)
- 省 二 空也寺の畑へうたん植えつけける(古句)
- (503) 糠屋へ来るは聲の本望
秋の屋 粉糠三合持ちたならば聲に行くな、といふ俗諺を採つたのであるが、其糠屋に來るを本望とするやうな聲では、聰明な男ではない。
- 東 魚 三合あれば聲に行かずとも良いと云ふ位な、その粉糠がフンダンにある糠屋へ聲入とは、結構な事だと曲くつたのである。
- 省 二 武玉川の中では、珍しく、かなりの皮肉な作だ。
- (504) 女に垣のゆるい九重
省 二 餘り嚴格でないので、間違ひも起つた。
秋の屋 女の出入が緩急であつたから、内裡拜といふ賣春婦が出来たのである。
東 魚 芥川の方、ゆるい事である。
- (505) 金剛杖を倒す松風
省 二 しばし足休めをする。金剛杖が風に吹かれて倒れる。旅道中氣分は出て居る。
秋の屋 金剛杖を松風が吹き倒すの敷。少し解釋に苦しむ。
東 魚 少憩するのに、松の根がたなどへ立掛けて置いた金剛杖を颯と吹き下す、松風に吹かれ倒される場合で、いかにも爽快な心持ちである。
- (506) 千鮭の目もこからしの道
秋の屋 山道かななどを提げて行く、千鮭の目を木枯が吹くといふので、冬枯の光景がよく表現されてゐる。
東 魚 枯木の様な千鮭、その目が鈍いながら、ピカツと光つてゐる。寒風が空林を鳴して吹き荒んでゐると云ふ光景で、如何にも
- 荒寥たる有様が思はれる。千鮭の目を提へた處凡手でない。
- 省 二 木枯ふくところ乾鮭の目は、一層の冬景色を描く。「乾鮭の戸に吹あたる寒かな」(千仙)。乾鮭は松前地方から多く出る。
- (507) 哀は上へ知れぬよし原
東 魚 上へは表面の意味であると思ふうはべは華かで面白さうに見える吉原も、内實は悲惨な事情がある。たゞ目先きだけは幸福さうに、面白さうに見える。
- 省 二 花魁は豪華な生活振りであるから表面觀察だけでは眞相は判らぬ。
- 秋の屋 賛成。
- (508) 尼になつても乳の張る寺
省 二 松ヶ岡の句。「鎌倉の牢は抱いて、這入れられず」(古句)、乳の張る理由。
秋の屋 是れも苦痛の一つで、暮夜には泪に咽ふことであらう。
東 魚 子を置いての松ヶ岡入りは、よくの事であらう。

武玉川研究(二月號)正誤表

頁	段	行	誤	正
六	一	九	故に實	故實
六	一	一二	雞抱く	雞を
六	四	三七	素堂	堂
七	二	一一	變短的	奇智

選郎路生麻

同	も何がそうさせたのか長期戦	大阪
同	純情の影にひそんでゐる氣儘	大阪
同	苦勞した丈が取柄の大番頭	戸田
同	フラ／＼出た人丈でこの人出	同
同	白人はあの表情で信じさせ	同
大阪	軍事便元氣々々と同じこと	星野
同	死ぬ死ぬと自分一人を大事がり	秀女
同	湯ぶねから顔だけ出して子の自慢	同
大阪	御堂筋一人ほつちの風が吹き	久松
同	母と娘と心のさけぬ膳に向き	明子
同	高原の夢はきれいな花と君	同
大阪	ストープのぬくさへマスコ外すなり	片山
同	もう穴があいたと見せるスフタオル	鏡水
同	カーブまでふんばつたバスガール	同
大阪	さす手、ひく手、顔も見てゐる	尾崎
同	高島田 顔が聊か尖つてゐる	方正
同	間の抜けた顔へ丸髭だけが生き	同
大阪	日給も月給も同じ 錢は錢	津路
同	千人針淋しく遺品の中にあり	紅多呂
同	五郎 劇笑つて泣いて又笑ひ	同
大阪	月の影君はやさをここにあらす	大鶴
同	太陽が月に似るなり霧深かし	喜由
同	娘三人 寄れば男の棚下し	同
同	御用船見送りの無く出港し	同
同	新知事夫人おもむろに歩き	同
同	榮轉がなごり惜しい記事で云ひ	同
同	股火して待たされてゐる幹事さん	同
大阪	西尾	栗

踏切をふなり返してふつさばし	同	長野縣 須坂	高峯柳兒
言ひ負けた餘憤こつそり辭書をくり	同		
名曲へねちを忘れて聞きこれる	同		
編棒に根氣が續くい、陽ざし	同		
應接間言ひ分があり強い待ち	同		
無理を云ふ妓だなご顎を撫でてゐる	同	張家口	小川靜觀堂
慰問書を壁にのこして後送され	同		



測量機のぞく手元を蝶が舞ひ	同	同	子の智慧をジツと見てゐる春の縁	同	同	家賃届けて家主の犬に吠えられる	兵庫縣	北川春巢
月曜日昨日當つた髭で出る	同	同	おたばこを問はれて女笑ひ出し	同	同	貰ひもの地味だと思ひ／＼截ち	同	同
それ見ろと罰があつた様に云ひ	同	同	これしきの冷えと銃後の水仕事	同	同	希望ある若さこだはらなく笑ひ	大阪	米谷松太樓
日本語で呑んで朝鮮語で喧嘩	同	同	赤禪二十二三の朗かさ	同	同	生か死か靜かに伸びる蠅叩き	愛媛縣	上甲可洲
母親は現狀維持の説をこり	同	同	御破算をしてから支那へ行く云ふ	同	同	天井へ猫の聲色吹きかける	今治	長野文庫
朝露を踏み母より便が来	山口縣	岩崎勇記	片假名へ片假名で来る軍事便	同	同	思ふ事多しオーバーの襟を立て	同	同
世の中に拗ねて算盤も別れ	下關	多田市多樓	子に妻に従ふ日曜オーバ着る	同	同	雪の道こゝらに溝があつた筈	同	同
隣から差入のある妻の留守	同	同	女の友情結婚をしてそれつきり	同	同	隱密も使ひ敏腕家と呼ばれ	治谷	心府
映畫館こゝは無難な銃後なり	同	同	體位向上白髪のラヂオ體操	同	同	軍需景氣職人といふ名がいばり	大阪	畑田よし江
母の死を知らぬ戦地の便りが来	同	同	勸誘は儲け許りを話すなり	同	同	シヤンが居て廉賣のシャツ買ひを	廣島	近藤須彌浩
彼女も金色夜叉か俺を捨て	同	同	喜びの溢るゝ姿支那の今日	同	同	記念品これ勤続の形見なり	朝鮮	弘津慶一
求婚に生活能力無いと逃げ	同	同	病人に成り晴天の有難さ	同	同	體溫表死に行く様を記すのか	名古屋	森由三錢

あこがれて来たに冷い大都會	大阪	夷一笑	老課長二十二形のねちを巻き	同	同	天王寺あそこらだつせ高架線	同	同
非常時だ巻ずし丈にしておこ	同	同	部隊長ばかりと見ゆる奉仕團	同	同	相棒がないのは土をならして	同	同
背中中お灸で埋めて醫者に診せ	同	同	聴診器當て場に困る肋骨	同	同	この熱でこんなブルスで呼吸をし	同	同
父さんはこの邊にゐる時變地圖	同	同	北斗星あまりに小さい吾が希望	同	同	書割を見てゐる様な雪の河岸	同	同
デパートで買った茶なり共稼ぎ	同	同	晋のせぬ一錢子供喜ばず	同	同	稼ぐ娘と今日を限りの湯をわかし	同	同
五十過ぎ木魚の音も信じ切り	同	同	きかぬ氣を火箸に者を云はすなり	同	同	戦死ならあきらめもする子が病死	同	同
鐺掛屋にはめられてゐる鍋の質	同	同	店仕舞少々の傷は承知なり	同	同	横範村豊かに見せるアスファルト	同	同
米櫃の底をはたいて粥が出来	同	同	一人立つ橋へ見下すつれが出来	同	同	皇軍に負けまい勇氣ある銃後	同	同
御威光を笠に悪事が續けられ	同	同	金・金・金・火葬場にも上・中・下	同	同	モーニンググ万才屋にはおかし型	同	同
押ポンプ油がほしい音で出る	同	同	喜んで吠えても犬はこわがられ	同	同	大角力負けて感想尋ねられ	同	同
營養論雜魚の骨まで捨てさせず	同	同	獨學は西郷さんの額をかけ	同	同	メガホンに恐れ入つてゐる交又點	同	同
春・春・春金は無くとも戀は無くとも	同	同	會ひたくもない人に會ふ新開地	同	同	なま欠伸又うつされて春の宵	同	同

〇〇に兒の不服けな軍事便	兵庫縣	増元甲陽	來客へ競つて出る新夫婦	同	同	初歸り帯をゆるめて膳につき	同	同
花嫁は足の運びを見てゐたり	同	同	クリークの水にも馴れた古參兵	同	同	古日記不和の兄さへ懐かしい	同	同
樂書に人情課長名をさゝめ	同	同	速記者の方が立派な髭を持ち	同	同	床の溫さがおいしい朝なり	同	同
生活線へ眞正面なる此の力	同	同	逃げまはる者には支那も狭い國	同	同	土産なき忘れぬ夫になつて死に	同	同
見込まれて養子樂しく稼ぎ貯め	同	同	朗らかに處女で嫁いで朝寐をし	同	同	離壇に無敵双葉の土俵入り	同	同
女だてら父祖傳來のたいびき	同	同	世が世なり嗤ひも出来ぬ木炭車	同	同	陳列の正札が裏向いてゐる	同	同
生一本下戸に生れぬ甲斐があり	同	同	手術室商店のごミス並ぶ	同	同	慰問文敵を斃した手でうける	同	同
洋装がこちらを向けば四十過ぎ	同	同	兩親にお手々引かれてぶらさがり	同	同	片意地を遂に通した五十年	同	同
春の風障子の穴がふえてゐる	同	同	旅の宵今日もネオンの街に立ち	同	同	山頂で見る我が町の小さすぎ	同	同
花嫁の借着姿も時節がら	同	同	これしきを貯金と思はぬ若さなり	同	同	勝戦夫の便り祈るなり	同	同
料理店のろけ五錢で客を吊り	同	同	晝下り一人淋しく運ぶ針	同	同	國策の脚光あびて寄せ屋来る	同	同

愛孫を失ひて

さかしかりき在りしその日を追憶し	同	同	補	水
------------------	---	---	---	---

去日、私は南大阪の交通地獄
と言はれてゐる阿部野橋の交又
點に立つてゐた。シゲナルが橙
色だつたので突走れば向側へ渡
れぬでもなかつたが、道々新聞

軌道の眞中にへたばつて了つたのである。

ことかも知れない。
 この坊さんだつて、お寺や葬
 刃わたり三寸といつたところを
 往来しなければならぬ吾々で

私はその有様を眺めてゐるうち、こみあげてくる可笑しさをどうにも押へることが出来なかつた。勿論この場合に直面したら誰でも慌てるのは當り前の話で、いくら坊さんたりとも、電車に轢かれて自ら佛になるのは可厭である。しかしどうもあの慌て方は坊さんには似つかはしくない。それだけ——薄情な觀察だが——たとへ燕尾服に山高帽を冠つた紳士と置き換へてもこれ以上のユーモラスな光景は僕には想像されないのである。一見したところ、山寺に籠つてゐた弘法大師の如き高僧の風格を偲べたが、今、寸前に演じたあの一瞬の動作は全く醜態であつた。山寺の坊さんも火宅の世界に降つたら、水を斷つた魚のやうに、死ぬに死に切れないものがあるらしい。要するに大悟徹底して死も亦怖れないのは坊さんにとつては寺の中だけの土地はない。家を一步出たら、然と圓光が晝かれないまでも、相當モノいふ高德の僧侶で御座らつしやるであらう。私は悟りを開くといふことは、どんなことを言ふのか知らないが、一體斯ういふ坊さんの悟りは、山が動いても泰然自若として眉毛一つ動かさないといつた態度をいふのではあるまいかと考へる。しかしそれなら、坊さんの悟りは、さあ悟りませうと言つた適當な場所と時間を持たなければ悟れない人ぢやなからうか、その上で、泰然自若するならするといつたやうなものである。こゝで私はふと大阪は轢かれても良いところといふかほるさんのあの有名な句を思ひ出した。これは生粋の大阪つ兒のしかも嬉しい溜息である。考へれば大阪はど生命に危つかしい土地はない。家を一步出たら、ある。然し、私達は、それを別に恐れ／＼と思つて決して電車道を踏み切つてゐるわけでもななく、寧ろ平氣で、うか／＼渡るのである。偶に、コラ！とか、馬鹿とか、呶鳴られることはあつても、そして狼狽へたり、慌てたり、方角も判らなくなり、眼前がくらくらつときても、それはその時の場だけで、案外ぬけ／＼した氣持で生きていつてゐるわけである。これは山寺の坊さんが腰を抜かしたのと較べて、どちらに悟りがあるだらうか。吾々、都會人の悟りは時間も場所もない。出たとこ勝負で狼狽へ、慌て、きりきりまい／＼をする内らにある悟り、轢かれても良いところともつて來たこの句は確かに川柳によつて救はれてゐると、私は斷然考へたのである。

鍾 亞 鷺 高

立ち止まつたのであつた。恰度その時、私の目を曇染めの衣を着た坊さんが、悠々軌道を踏み切らうとした瞬間、赤信號が出たので、電車、バ

あつた。山寺の坊さんも火宅の世界に降つたら、水を斷つた魚のやうに、死ぬに死に切れないものがあるらしい。要するに大悟徹底して死も亦怖れないのは坊さんにとつては寺の中だけの

かけても良いところといふかはるさんのあの有名な句を思ひ出した。これは生粹の大阪つ児のしかも嬉しい溜息である。考へれば大阪はど生命に危つかしい土地はない。家を一步出たら、

をすする内らにある悟り、轢かれかけても良いところともつて來たこの句は確かに川柳によつて救はれてゐると、私は斷然考へたのである。

一路集

募集句

大將も戰鬪帽で若く見え敵の大將バタ／＼死ぬる紙芝居大將が腹を切るのは日本だけ大將は戦争ごつこで死なねなり轉業をして大將と呼ばれてゐる内の大將はと女將脂ざり大將の微笑に秘めし苦衷あり重寶を果した大將子ほんのう大將語らず只部下を褒め大將の和服姿で低う居る日の丸を背に大將の御講演

同 巨 人 同 龜 一 水 不 水 半 休 水 客 靜 堂 同 觀 文 庫

講演は大將にして咳もなし
大將は奥です小僧火にあたり
大將の微笑を逃さぬカメラ陣
大將の號令已に敵を呑み
わしが國陸軍大將始末とし
大將の慰問袋は女文字
傷兵の意氣大將の腫がうるみ
大將の夫人で年が一つ上
平服で出る大將へ月九し
大將は一人の姪が苦手なり
大將は機械體操が下手と書き
大將もヘイタイサンの慰問文
惡戯でしたと大將の父が言ひ
大將の息子に補充兵として
曰偉無事大將は握手する
座談會古參大將立志傳
大將の地圖へ武官が寄つて居る
大將は大將としての第一戰
英靈の前へ大將途中下車
大將の息子に生れ來て三枚目

桃 鰐 紅 同 神 夢 同 曉 同 三 同 同 曉 同 斗 形 比 芳 石 紅
子 洞 多 呂 樂 女 明 錢 童 風 水 呂 志 郎 鐵 多 呂

買はぬ氣の儘を大將と呼び戻し浪曲が好き大將の葉巻めざり副官に大將の氣が飲み込めぬ大將に乗ると名馬の歩調なり大將は一言云つて盃をあげ大將と呼ばれハッピに穴があり大將の趣味盆栽があるばかり大將も兵も生きては歸らぬ氣大將の袍持つのも偉い人大將の下手でも味のある話大將の話政治へふれて來す大將の涙を白衣見てしまひ部下の事憂めて大將寂しさう大將と呼ぶ面識も無い男、「大將」とは作り易さうな題で、づき難いだけに、つかまへどころになるので六つしかつた。特にとはらなかつたけれども、風葉氏も異色ある旬風であつた。その中大將の袍を持つのも偉い人大將の袍持つのも偉い人

訂原
正句

その實、近
かいつしよ
佳作として
のものが最
のもの

同 同 同 同 同 風 九 同 孤 同 春 双 ライ
葉 二 同 蓬 巢 虎 ト
み 夫

居ながら偉い人」といふ意味であるに反し「大將も偉いが持つて居る人も亦偉い人だ。」といふ意味になるが、わづかな字句の使用方法によつて意味が變化する實例を示したわけであつて、必ずしも訂正の方がよいといふわけではない。

大將の涙を白衣見てしまひ想像に生れたものであらうが情景をこゝまで描寫したのは老巧である。

大將の涙を白衣見てしまひ
想像に生れたものであらうが情景をこゝま
で描寫したのは老巧である。

オルガンもピアノも有つて未亡人
老母への遠慮ピアノを細く聞く
洋装に馴れてピアノをねだるなり
ピアノド、レ、ミ、ハ友達に羨まれ
ピアノストおこつた様に弾き終り
感情のまゝにピアノへ指が觸れ
花は一輪演奏を待つピアノ
目的は別にピアノへ弟子となり
年頃の娘あるらしピアノ鳴り
療養所ピアノの音ものどかなり
鳩ボツボピアノへ小さい口があき
ピアノ弾く背に愛人の眸を感じ
わからないピアノへ裏い拍手なり
月光をあびてピアノの音流る
ピアノなる月に見上ぐる大郎
天才兒ピアノへやうやく手が届き
御令嬢ピアノの前で撮るなり
賣られゆくピアノ仲仕の手で積み
名門を捨てゝピアノに生きてゐる
下手ながらピアノも趣味の一つなり
デパートでピアノのキーを盗み見
放送のピアノわからぬまで聞き
一年生ピアノに合はぬ歌となり
失戀が完成させたピアノ曲
ピアノが入つて校長は訓示をし
あゝあの日ピアノへ立ちし君なし
鳩ボツボ彈けてピアノの子の機嫌
聞きたれて父はピアノを聞いて寝る
アンコール受けてピアノは撮される
卒業の記念にピアノ伯父かくれ
佳のお針娘の暫し休めたピアノ
佳子のピアノわからぬ父も座す
佳未亡人ピアノに思ふ過去の夢
佳生垣を洩れてリズムのいいピアノ
佳嫁終るピアノへ涙いアンコール
地卒業の褒美ピアノを買ふ話
天國産のピアノへ強く愛國歌
ピアノに對する各作者の構想は仲々面白
拜見しましたが中には全然ピアノを知らな
方もある様です。又句としてどうかと思ふ
ものもあります。職業意識から見たピアノ
しては誠に實感的のものにふれたので自分
感じたるものを頂戴しました。(夢)

夢裡選

桃子
孤篋
ライト
同
一笑
よし
鰯洞
正柳
みつば
同
同
同
文庫
形水
斗國
紅多
同
風潮
曉明
神樂
近女
不夜
曉夢
斗呂
比呂
巨呂
水宮
一魚

演藝・映画に

シカゴ

IN OLD CHICAGO

ユシツブ ヌヴィナ・品作クツナザド ルリダ
ドーゴ クツマ・暫監グンキ イリンへ 作監
曲作詞作ルエツレ イリハに並ン
アワバ ノロイタ.....ノオイデ
アイフ スリア.....ル ベ
ーチメエ ンド.....クツヤジ
イデラブ スリア.....イリク
ニアツイデ イデナ.....ル
イヴレンド アイラブ.....ル
ンウラブ ム ト.....ブ

概

一八五〇年の頃、愛蘭から渡つて来た移民のオラアライは目的のシカゴ市を目前にして事故の爲に急死した。

男勝りの未亡人モリーは幼い三人の子供を抱えて艱難辛苦しながら、その教育に専念した。斯くして二十年は経過した。

法律を志した長男のジャックは正義派の闘士として法曹界に認められ、次男のデイオンはボス政治の巨頭ギル・ワレンの片腕として市政界の新進として名を賣り、今ではワレンを凌ぐ實力あり、とまで騒がる程になった。氣鋭の彼は、その勢に乗じて、上院議員コルビーを後補として、舊の親分ワレンに挑戦した。しかし老獪なワレンは敢えて彼に双向はらず下手に出て次期市長選挙に立候補する際の應援を依頼した。ワレンの陰謀を察知した彼は、表面はそれを快諾しながら、秘かに腹心の部下を兄ジャックの許へ遣はしシカゴ市政刷新の爲、立候補する事を勧め、自分の勢

力地域であるパツチの大衆を動員し、大々的な援助をした。かくて市長選挙戦はジャックとワレンの間に白熱的な大激戦となった。その間、デイオンの苦肉の計画がワレンを危地に陥れ、結果は若きジャックが壓倒的大勝利を得て輝く新市長として登場した。ジャックは直ちに自分の正義観の赴くままに、その職權によつて従来の暗黒市政に大鐵槌を加える決意をした

「大義親を滅する」の立て前から先づ弟のデイオンを檢舉する必要を痛感したデイオンはこと志と違ひ兄の意外な態度に憤激した。かくて骨肉相喰む激しい闘争が始められた。兄弟の争ひを末弟の報せによつて母親のモリーが知つた時、彼女は納屋に居つたが、急いでその場へラムプを置いたまゝ馳せつけた。ラムプは其處に繋がれてゐた牛の尾によつて叩き落された。忽ち燃え上る炎の渦、折からミシガン

湖から吹きつける突風に煽られて瞬時に燃え擴がった火炎は遂にシカゴ全市を火の海と化してしまつた。嘗つて兄弟の爲に失墜させられたワレンは、この火災は兄弟が談合で放火したのだ。と流言した。デイオンも亦、火災の原因は、彼等の巢窟であるパツチ区域を焼き拂はん爲のジャックの使喚だと思ひこんだ。ジャックは身の危険を打忘れ、出動した軍隊を指揮して消火に努めた。斯くて、ジャック、デイオン、ワレンの三者は燃え盛る火炎の巷に對立するワレンの流言に惑はされた群衆の暴動、群衆の先頭に立つて煽動してゐたワレンの放つた一弾に、ジャックは遂に斃された。

角座(二月興行)を観る

この映画のよさは、まづ、現時を認識した健康な意思の上に立つてゐること、舞臺は理想化された平和な農村である。案山子の勞苦に感謝するやうな人の好い老村長は、陸軍航空兵中尉である息子の太郎が、明朝十一時に、この村の上空を報の獻納愛國號で飛ぶといふ電報を受取つて嬉しくて堪らない。翌朝は早々から愛用の自轉車で町まで双眼鏡を借りに出掛け、内心大いに得意で、逢ふ人毎にけふの息子の訪問飛行を觸れてゆくうちに川へ落ちてしま

ふ。前半の面白味はなんといつても村長に扮した小杉勇の飄逸な動きと、味のある臺詞とでつくられてゐる。田坂監督はこの零團氣の中から、航空兵將校を子とする親の、兄とする妹の、或は許婚のそれの心理をひき出して、こゝろ憎いまでの演出處理をみせてゐる。殊に後半の村の上空を、思ふがままに飛ぶ飛行機に寄せた興奮の数場面は、卓抜なる伊佐山技師の撮影効果と俟つて、觀者の頬に爽やかな空氣の動きをさへ感ぜしめる。片山明彦、轟夕起子、花柳小菊、吉田一子らが小杉勇をめぐつてそれの性格を發揮してゐる。素朴な抒情の中にユーモアがあり、しかも香氣と艶のある一見に値する佳作である。

歌舞伎座見物(三月興行)

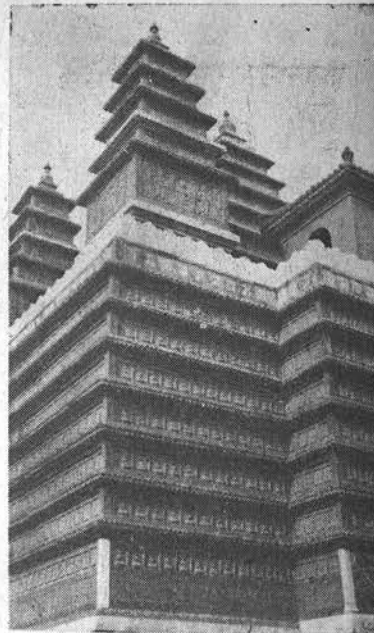
東京新派總動員

乗合馬車 戦禍から逃れ乗合馬車を待つ 再會に俟たぬ女も弱くなり 髪一つ結ばずおすわは金を貯め 女への見得に金貸す程に酔ひ 酌もして自分も飲んでお種去に 五分と五分金は火鉢へ叩きつけ 生靈になつて小篠は逢に來る 浮世繪の女の手には酒器を持ち 春の踊去年の方を褒めて出る

川柳を観る

奥村丹路

遺言ヘシカゴの空に動く雲
遺言を三人別に聞き育ち
警官が走つて來れば甘い戀
ステージを一人で埋めたベルの顔
親を捨て子を捨てるまで持つ荷物
正義の死ジャックの最後淋しすぎ
艱難辛苦シャボンの泡へ子が育ち
ビストルの音へ正義の華と散り
セツトとは云ふものゝ火の恐ろしさ
市俄古燃ゆかなしき兄弟の顔三つ



反蔣のポスター

北支蒙疆の印象 (V)

麻生路郎

寫眞 岩崎柳路

(47) 喇嘛寺屋上の塔

十月九日の朝、大同から再び外邊の長城を横斷、西北方へ二百八十五キロを汽車に揺られて午後四時過ぎ厚和站に着いた。三時ころに着く筈が事故のために一時間餘遅着した。

綏遠ホテルの自動車が居るかと思つて、そこを物色したがゐない。何處の驛でも澤山ある筈の洋車すらゐない。汽車が延着したので皆、引揚げてしまつたらしい。

たま／＼ゐても、行かうとしない。全く没法子だ。柳路君は

靴を、僕はトランクを提げて、街があるだらうと思ふ方角をさして、ぶら／＼出駈けた。右側の支那家屋に日の丸の國旗が出してある。白布の中央に梅千のやうに小さな日の丸が書かれてある。なるほど、日の丸の國旗には違ひないが、私達の眼には自國の國旗の感じがしない。數町にして人家を離れ、ボブラの一本道を左に眺めて、田圃の中を滅茶々に歩いた。前方に日本人らしい姿を見付けたので、急いで追ひ付き、綏遠ホテルへの道筋を訊き質したところが、

「これから一里以上もあるでせうな。向ふに見えるあの洋館が公會堂ですが、あれからでも大分にあります。私も街の方へ行きますから、一緒に行きませう。」

どうかの會社の技師らしい人だつたが、いろんな質問に應じながら、土堤を歩き泥濘の小徑を跳び越えたりして、街の中へ来た。時計台のある處で洋車を見付けて、ホテルまでの交渉をして呉れたが、「いや足が痛んでる」とか「腹が痛い」とか言つて應じない。

辛うじて他の洋車を應諾させて、その同胞が姿を消した。二人は洋車をつらねて、時計台を南へ商店街を抜けて綏遠ホテルへ辿りついた。

此處のホテルも色彩に富んだ支那家屋の改造で、平家建が長方形に並んだ形で、中央部が廣い庭になつてゐる。

★

蒙古聯盟自治政府の首都厚和はもとの歸化城(舊城)と綏遠城(新城)の二つの市街を合併して漢名を廢し、蒙古風の稱呼厚和(青い城)と改稱したもので、譯から新城、舊城へそれぞれ、四キロ、新城舊城間又四

キロをへだてゝ居り、驛、新、舊城相互間にはバスが運轉されてゐる。兩市街を合せて人口が約九萬、現在日本人の居住者は約六百人位ださうだ。四月から日本人の小學校が開校されたが、十一名の生徒が今では五十五名からになつてゐる。家族的移住者が日に／＼増加して行く有様

(48) 時計臺から南大街を望む



歸化城にある。歸化城は明時代から特に漢人が蒙古進出を企圖し商業街としてつくつただけに綏遠城に比べると、城内の通りはいづれも狭くてきたない。然し街の中央を北から南に約二十丁を貫ぬく大南街はとても賑やかだ。其中に、日本の料理店やカフェ、雜貨店などを見受けた。商店街の二階から成吉思汗料理の煙りが濛々として街路へ流れ出てゐるのも此處の一風景である。名所見物としてはその殆んどが喇嘛寺であるが、それも支那軍に荒されて宏壯な殘骸をとめてゐるにすぎない。然しそれらの喇嘛寺の塔や公園の夕陽を浴びた羊の群や街路を横きる駱駝の群などを見てゐるとさすがに蒙古の都だなと思ふ。

★

夕刻から此處の公會堂へ出かけた。堂々とした洋式の公會堂には一寸意外だつた。當夜は陸軍戸山學校の音楽が想像し得やう。私等の宿泊した綏遠ホテルは

【評句】

近作柳樽から

福田山雨樓・西田 艸樂



ウイタミンB、C等と林檎むく 三十路

山何かしら新鮮味のある句だ。果物一つにもその榮養價值に神經を使はねばならぬ近代人の氣持がよく表はれてゐる。その昔ニュートンに地球引力發見の動機を與へた林檎、永遠にフレッシュな饗宴を續けて行くリゾ。

艸グイタミンだのホルモンだのが既に専門語でなくなつた。民衆の知識が高まつたといふものか、それだけ日常生活が小五月蠅くもなる。

無口に生れ職人となる

石 鐵

山武玉川のやうな張りを湛へた句である。職人型の一面を喝破した句。そこに何等かの人生批判が織り込まれてゐる。冷やかな觀察、しかも情熱を寄せて人生を眺めてゐる。一面において句が概念的なドグマで被はれてゐる事も見逃せないが、艸強い主觀を藏した寄觀であると利いてゐる感じである。

旅費とりに来る視察にも皆慌

山山痛烈なる諷刺句である。地方巡視と云ふ名目で出張する官吏と、その監視を受けてゐる役人との腹の底が遺憾なく剔抉されてゐる。下五に滑稽味が漂つてゐるのも面白い。

干物の需を發して太陽落ち 三郎

艸詞のつぎのなだらかな、そして裾を残して巧な言ひ廻しに暮れ易く、溫熱の乏しい冬の一日が容赦なく終らんとしてゐる様がよく出てゐると思ふ。似た古句があるかも知れないが、山うま味は確かにある。穿つた表現も首肯出来る。それでゐて、川柳としてのある物足らなさを感じるのは、川柳味に富んだ感懷から遠ざかつたものになつてゐる爲めではないかと思ふ。こゝで干物の下をくぐるも集金人と云ふ新永氏の句を思ひ浮べたが、これには人物の生活感情が表はれてゐる面白い。提出句とは句意は違ふが參考となるであらう。

サカサのニツと笑つた娘が 寄 史

艸生活故にあさましい姿の女角力。それを見て悔いた事がある。サカサの娘と來たら一層悲愴である。運命を觀念して、危つかしい藝當をやつて行くニツと笑つた笑ひは決して愛嬌でもなく、可笑しさでもない。どうかした拍子に本能的に白い齒を見せた。「淋し」は作者の感じである。

隊の演奏で、岡田部隊長が日本刀を腰に指揮棒を揮つてゐられる姿は全く偉観であつた。入場者の大半は軍人で、他は居留民、蒙人、漢人等であつた。演奏曲目中、一同を感激せしめた物は實に勇壯な「攻撃」であつた。「愛國行進曲」は部隊長がぐるりと姿を聴衆の方へ向けて指揮し、聴衆の方が見よ東海の空明けて旭日高く輝けば、天地の正氣發刺と希望は躍る大八洲……と唄つた。私達はこんな遠い所まで来て「愛國行進曲」の合唱をするなどとは思ひもよらなかつた。感激の極みであつた。そして岡田部隊の宣撫的行動に對してひそかに感謝した。

日本人經營の第一の料亭としては「月の家」が知られてゐた。これとてもバラック建てにも等しいものであるが、相當に流行つてゐた。こゝの女將はなか／＼のしつかり者らしい。漢口あたりへ陥落前に進出する希望を持つてゐた。果して、行つたかどうか其後の消息は知らない。

★ 蒙疆各地には反蔣のポスターが随分澤山貼られてゐたが、厚

(51) 歸化城郊外王昭君の墓と路郎主幹



和の慶凱大橋の袂の支那家屋の壁にも、多數のポスターが貼られてゐた。一々其辭句を記憶しないが、その一枚を紹介すると

の歸途再び緩遠ホテルに一泊する事にした。其夜、女中の話で漫才の五郎、雪江が泊つてゐることを知つたので、刺を通じさせた。そして雪江さんの部屋へ



出かけた。ところが五郎君も来てゐた。話が居留民のことになると、五郎君眞面目くさつて、もつと優秀な人物をどし／＼よこさにや駄目やと云ふと、そんな

(50) 緩遠ホテルの雪江君、路郎主幹、五郎君



王昭君は二千年の昔匈奴と漢族の戦ひに、漢族が敗れたので、匈奴王が漢の絶世の美人を求めた結果、其犠牲として異族の妃となつたが、匈奴王が死んだので、二代目の王様の妃になるやうすゝめられたが、節を守つて肯んぜなかつた。そして漢朝に歸して呉れるやうに願つたが、いれられないので、黄河に身を投じたと云はれてゐる政略結婚のヒロインだつた。

こんなロマンスは内地にも珍らしくはないが、殺風景な異域だけにただ何んとか哀愁を感じた。(つゞく)

然し王昭君の墓碑訪問は思ひ切れないなかつたので、包頭から

翌朝になる。いよいよ王昭君

街に住めば

高橋かほる

慰問袋に入れて送るつもりでわざ／＼買った端唄と笑話入りの皇軍慰問酒の白鶴を中味が見たくなり、封を切つて端唄や笑話

おむつ

濱田久米雄

「子供が出来たらやゝこしいですよ」——とさもやゝこしい様に聞かされたものだ。勿論子供のいのがどんな風にやゝこしいのか解らなかつた。唯おむつを替へて乳を飲ませばいいのと思つてゐた。ところがそうでない。おむつだけにしても一日に一枚や二枚ではない。當ててやるまでには洗はねばならぬ。干さねばならぬ。たたまねばならぬ。寒い時には温めて置かねばならぬ。そして替へてやらねばならぬ。物が云へぬから泣く。何でも不平不満は泣いて解決をつけるのだからたまらない。雨

雲よ散れ／＼ 家も隣も赤ん坊 山雨樓 明日の天気見込を申し上げますにこれ迄とは變つて熱心に耳を立ててゐる妻のこころもうなづける。

喜多八で 喰つて兜の 味を知り 仁兵衛

北さくら橋 とんかつ 喜多八



りよだ京東

鳥座銀

身體髮膚

岡田某人

横山エンタツ演ずるところの
マンザイに曰く、「君とは古い
友達やな」「そうやな、まだ耳
の生えてなんだ時分かなや」と
いふのである。全く考へて見る
と耳なんて、中途から生えて来
てもよさそうなものである。

近頃小生の知人が入院してゐ
るが、病名が急性脱疽。指が落
ちるあれである。切らねばなら
んかも知れん。そんな話をみん
なでしてゐると切るとの切らんの
と心安さうと噂する心理の底に
は何か切つても跡から生えて
来るやうな感じがひそんでゐ
るらしい。所が云ふまでもなく
一旦切ると指なんて金輪際生え
つこない。それに思ひ至ると第
三者といへども話の深刻さには
つとなるのであるが、更に考へ
てみると、そんな、なんぼでも生
えて来さうな錯覚が、人間を甘
くしてゐるやうでもあり、「こ
んど生れて来たなら」といふ轉生
の感情にもなるらしい。

裏を行く

小西落丁

他人をだし抜いて奇利を博する
ことが、商賈の常識の如く考へ
られてゐる世の中である。百貨

公用で歸京の志郎軍曹

二月の東京柳壇を賑はせたの
は、出征以來川柳伍長の名を戦
線にも、銃後にもかつくり植え
つけた、紅ン坊改め耕谷志郎軍
曹の公用による歸京だつた。二
月一日前後の半日ばかりの滞京
中をきやりの句會へ出たり、日
本文藝社の句會へ出たりで川柳
的にも却々多忙だつたやうであ
る。殊に日本文藝社の句會など
は、柳壇的にはその存在さへは
つきりしないにも抱はらず、東

京日々新聞の社會面へ寫眞入り
で扱はれたのだから、品川陣居
君が健在だつたら、どこかの川
柳時評で大々的に提灯を持つた
のであらうが、それらしい提灯
が見られないので、淋しがつて
ゐるものもあるとか？

凱旋した六佳史君

きやりが志郎軍曹の歸京を迎
へた約半月後には、川柳研究の
幹事關口六佳史君の凱旋歓迎句
會が例會を兼ね催された。志郎
軍曹は上野の五十番で歓迎宴が
催されたが、六佳史君には一般
の宴會はなかつた、まさか六佳
史君が志郎軍曹程有名でないか
らといふ譯ではないだらうが川
柳研究社だけの凱旋川柳兵隊で
なく、東京柳壇として迎へた方
がよくはなかつたらうか、京濱
川柳吟社聯盟も解消した噂もな
いのだから、こんな時こそ存在
を示すべきだつたと思はれる。

社交機關のこと

東京が廣いからか、川柳家が
急いからか、或は外にわけが
あるのかしらないが、近頃の東
京柳壇では、地方から柳友が来
ても、訪問をうけたもの以外に
は、却々逢ふことが出来ない。
例へば最近の例では、満洲から
安井八翠坊君が、紀元節前後の
東京に来て居たらしいが、その
頃には近藤仙坊君の七回忌だ
の追悼句會だのが催されて居た
にも拘はらず、出席しては居な
いし、歓迎の集りも催されては
居ない。八翠坊君にしても随分
會ひたい人もあつたらうに、五



ち食すところ
店湖月
ち食すところ
ち食すところ

肥後訛り

櫻川不水

この正月に歸郷してゐた長男
と次男が、歸宅早々腸カタルと
罹り、枕を並べて病臥すると云
ふ始末に全く憂鬱になつてゐた
所、今日(十九日)久方振りに
歸つて見ると、各部屋とも奇麗
に掃除してあり、子供達は昨日
から元氣よく登校してゐると云
ふので、私は俄に活氣付いた。
稍薄陽ではあるが陽當りのよい
微光で新聞を見様とすると、そ
こにはちゃんと我が川柳誌が置
いてある。子供は快くなるし、
柳誌は来るし、いよいよ天道様
迄が暖かいし、いよいよ天道様
ものだ、愈々朗かになつたこ
です。何時になく荆の妻もにこ
／＼してゐる。(不斷でも相當

の愛嬌あり)私が柳誌に手をか
け様とすると、
「あゝた(貴方)の事」此度はほん
によか句のあるけん」
と、語尾を引つ張つた所、如何
「どこだ」
と、そこは一家の主です。その
時義經少しも騒がず、一寸男の
見得を切つたつもりです。
「そら、不朽洞何とかの路郎さ
んの句たい。ほんによかけー
ん」
又しても引つ張る。私はやを
ら「その實情でたらしい」表紙
を渡した。やをらはにわたので
す。あるく、うん／＼と、私
は一人で悦に入つた。
「鷹一歩は素晴らしかねー、パ
トンもよか、西さしてもよ
か。正月だけん路郎さんも頭

張りなはつたらう」
元來肥後産である私です。妻の
肥後式感嘆詞に釣ひ込まれて私
が、肥後訛りを連發した所で不
思議はない。
「鷹一歩はほんによかなし。流
石あゝた達の大将がたあるば
い」
大膽な妻の讃辭だ。この零圍
氣に於て、肥後人たる私達二人
だけの對話としては、この大膽
な言葉は實に適切だと思つ
た。凡てを忘れ、心の進るま
武骨に云ひ放つた、眞の言葉で
一段と高くなる様に覺えた。そ
の夜私達のテーブルには、時なら
ぬ柳談に花が咲き、「三目女房
の御意に任すなり」ではなく、
鷹一歩はほんによかなと肥後訛り

洋装の
第一線
に立つ
ドレスツクリ
プールプー

南區心齋橋一丁目四四番
電話南27119番

柳素人描

(三七) 小川百雷君



想像したくでも煩はしい大阪廣告主俱樂部に職を奉じて、こともなげに日を消してゐる百雷(ひやくらい)君は、小川慶一君はたしかに一異彩である。君は人に接して總じて明快である。しかも、君が川柳に手を染められたのは大正十四年九月、川柳雜誌社主催の柳翁忌句會に出席し

て以來ださうな。君の句風は休む日のある境遇に甘んじるこの邊へ洋服筆筒置けばよし妻病む日物質主義にならんとすの如き生活即川柳の佳吟によつて、自己省察の精進振りである。君は多くを語らぬが、仄聞するところによると廣告主俱樂部の仕事以外に、舞踊家のマネージャーをも兼務されてゐるとか。君ならではの感が深い。君は明治三十四年十一月四日大阪市に生れ現在大阪市西成區北吉田町に居住されてゐる。所屬吟社は昭和川柳社、川柳人協會理事

(三八) 岡田某人君



妻アリ子ナシといふ氣樂な某人(ぼうじん)君は本庄川崎町でアパート生活をし程八軒、會費約六拾錢、辨當各自持参のこと。兼題「遠景」橋本絲雨選、「櫻」姫田夕鐘選各題三句。鉛筆持参。幹事(夕鐘、某人、水客、潮花、吞水、豆秋、ライト、双虎、紫香)★松坂俱樂部綜合展と川柳大會

て、大阪鐵道局に職を奉じてゐる。「須磨時代の犬は？」と訊けば「あれ他所へやりました。外の部屋の漬物を喰へましてな。近所へやつたもんだすよつて時々ひとり遊びに來ます。はじめて淋しいやろ云つて休みので連れて來たの道に覺えたのだす。天満の映畫を見に行つたらいつも犬の映つる寫眞、そのうちに犬が映らぬと思つてゐると、犬の幻影のついた男の映畫、何處までも不思議と犬がつき纏ひます」と犬の話になつと熱をあげる。

川協のページ

★西日本鐵道川柳大會

大阪鐵道局、展望社、廣島、下關各支部合同、川柳人協會後

援の下に西日本鐵道川柳大會を三月二十五日夕から尾道驛前松風館で開催し、鐵道人の川柳熱をあふることとなつた。

麻生路郎師の講演「旅と川柳」某入氏選、「徐行」

苦樂公氏選、「廢物」久米雄氏選、「ゴム印」不水氏選、大阪、四國方面から鐵道人外の参加もあつて盛會を豫想されてゐる。會費五〇錢。

★川柳ハイキング

川柳雜誌社では四月二日(日)、身心鍛練を兼ねて吟行を開催することとなつた。参加希望者は午前八時半阪急梅田のりば煙草店前集合のこと。行程は阪急中山下車、中山寺參詣後奥の院を経て清荒神へ詣り阪急清荒神で解散(行

二月の三川柳會

(てへ迎を氏兩人境・郎路)

兼題「商品券」麻生路郎先生選、「マネキン」長崎柳秀先生選、各題二句當日持参。會費三〇錢。なほ各題の天地人に賞品

★松坂俱樂部綜合展と川柳大會は創立三周年記念として俱樂部展を同店七階に於て四月廿日より廿六日迄開催、川柳講座の人々も参加出品の筈、なほ同展開期中の四月廿三日(日)午前十時午後三時、松坂俱樂部三周年記念川柳大會を同百貨店中八階の間に於て開催し、川柳家の來會を歓迎する由。

兼題「商品券」麻生路郎先生選、「マネキン」長崎柳秀先生選、各題二句當日持参。會費三〇錢。なほ各題の天地人に賞品

★全滿川柳大會

★四月二十九日奉天江ノ島町奉天溫泉ホテルで全滿川柳大會開催の由。兼題「掌櫃」木耳氏選「國境」壽明氏選「試み」月南氏選「進出」天弓氏選「蔣介石に告ぐ」八翠坊氏選、各題三句メ切四月五日、投句所撫順市北臺町二ノ八ノ二五撫順川柳社

柳界展望

催

全國川柳界のこと各地川柳人の一舉手一投足を此展望欄ですぐわかる様にしたい皆様の御通信を歓迎する。(係)

▼二月五日、十九日午後一時、松坂俱樂部川柳講座▼七日二十日夜、有恒川柳會▼二十一日夜川柳雜誌社二月例會を誓得寺に於て開催▼二十三日夜、親友會(尼崎)句會▼二十四日夕、阪大川柳會▼二十六日夜、尼崎句會(廣岡クラブ)以上何れも路郎師出席。

消息

▼岩崎柳路君(張家口)一月九日に川維蒙疆支部の第一回句會を開催、同十五日に第二回、同二十二日に第三回と日曜毎に句會を開いて大いに蒙疆のため氣を吐いてゐられる。

▼福田山雨樓君(不朽洞會員)は又々眼病の由。平癒を祈る。

▼朝田新水君(大阪府三郷町)君が川柳の門をくぐつたのは昭和八年二月だそう。その句風はその才筆といふに定評がある。

落目の死他人が泣いて呉れるなりうち一人馬鹿正直で哀れなり如露如電但し家賃は前拂ひの數句にさへ充分窺知し得られるであらう。深酷な觀方、皮肉な描出、若いのに似ず澄ましたやうな風格をそなへてゐる。趣味はと訊けば「有るやうな無いやうな……何にでも興味は持つけれど一向何もやらない。」とそらとほけた返辭でばかりしてしまふ。

君は姓を岡田、名を德次郎といふ。明治三十九年十月十四日生、出生地は明石市。川柳雜誌社大鐵局支部畔柳社同人、川柳雜誌社不朽洞會員、川柳人協會正會員。

▼村松夢裡君(不朽洞會員)は三月十二日三重縣湯の山溫泉に清遊された。

▼多田市多樓君(下關)が三月七日來阪されたので、路郎主幹某人、水客君等が大阪驛頭に迎へ、本社へ落ちつき、道頓堀方面を案内、伊勢參拜で同夜十一時四十分湊町發を見送る。

Sata Special Klinik

呼吸器病科

診療 毎午前

加藤謙一

螺良四郎

院醫多佐

四八二八北電 町北島堂阪大

★天地人五客は前々號・兼題前號發表★

席題 支那語 石井白面人選

支那の子にいつか馴染ませる言葉
支那語のうまい女給上海をうらや
丸刈になつて支那語の本を買ひ
眞心がわかつた等の支那語聞く
あやしげな支那語兵士と遊び
長期戦支那語も武器の一つなり
にんには支那語の息にききこひ
支那語やゝわかり従軍一ヶ年
支那語科を出て洋々の天地待つ
仲居などすれど支那語は達者
宣撫班支那語のしやれり初
連絡船支那語の辭書もつてのり
支那語など忘れさせたい宣撫班
B Kの支那語に支那を志し
日章旗持つて支那語に迎へられ
辛うじて通じ支那語でつりも奥れ
假名にして書き支那語なり
支那の子に支那語を眞似て笑はる
希望ある若さ支那語をよく覚え
新天地めざして支那語科をえ
子供から支那語を習ふた占領地
わからない支那語おじぎをする
軍事便支那語に假名を付けて来る
少年の理想支那語へ努力する
支那語をも混ぜて「輩平」書き
大儲けする氣支那語の本を買ひ
支那語覚えて大陸の土になら
表情を變へず支那語は讀くなり
港の夜支那語で話す男あり
占領に危しい支那語役に立ち
獨得の支那語をしやべる部隊長
感激の支那語日章旗を振つて

應揚にちよつと値切つてみた夫人 連城
十二月某日夫人の慈善鍋 鮎美
ベルシヤ猫夫人の臂のあとに 三巴
社會鍋夫人女中に入らせせる 變人
インテリ夫人と等の立場を話し 夕鐘
洋装の好みゴルフもする夫人 白面人
老夫人食後をそつとゐるばかり 某人
無憂華に似たる姿の日の夫人 沐天

夫人 同伴行先は伊豆熱海

ウインドへ夫人の心をそれてゐる
江戸辯で喋る夫人の派手な髪
流行も無し主婦といふ名をまもる
競馬場スツタ夫人の呼吸深みし
國策へ夫人の光るものが減り
何れも夫人とのみで避著地夜話
榮轉へ夫人同志の語ること
令夫人此頃はやる柄に飽き
會長の夫人目鏡がよく光り
夫人から招待が来る誕生日
御夫人は商店街を素通りし
氣位の高い夫人として出好
招待日パトロンと云ふ顔で夫人
慈善鍋夫人のダイヤ光るなり
笑ひ囁みしめ御夫人の隅にある
肩書が二つ三つ夫人忙し
洋装のうつる夫人のひやゝかさ
萬のつく金を夫人の名で献じ
万事皆夫人で事の足りる家
受付の夫人の徽章よく動き
成功し夫人の功も記事となり
奥女中夫人の趣味に似せて着る
社員も夫人まんまと取り込
榮轉へ夫人も腕のある噂さ
蔭膳の寫眞夫人を褒めるやう
家庭とは別に夫人の忙しさ
氣紛れな夫人に書生あはてたり

席題 頼母子 河野夜王選

頼母子を落して子等の新學期 亞鈍
頼母子を作る話へ冷える夜 琴泉
頼母子と書いて家計簿つが 史朗
頼母子にたよる生活があら 正哉
頼母子で故郷の土を踏みに行き 風葉
頼母子にゆとり残して春を待ち 沐天
頼母子を落して拂ふ金を借り 雨亭
頼母子も掛けて銃後の子を育て 新水
頼母子を落し不仕合せが續き 巨入
頼母子の金懐中でさぐつて見 朴堂
頼母子を落し國債買ふ暮し 邦花
頼母子へ替替へない金の艶 五一
頼母子に主人の知らぬ口一つ 墨二
戦時下として頼母子の遣ひ道 州鳳
臨月へ頼母子落すことにきめ 葉

頼母子を待つ夜の猪口を取り

頼母子を落し無事に子を出産せ
こち／＼と貯蓄頼母子きらひ
頼母子をかけて女の氣が強し
義理のあるところ頼母子頼
頼母子にたよる生活のつゝま
一年も先の頼母子あてにする
弟に遣る氣母の頼母子講
頼母子へ一人不安な顔があり
頼母子を落して娘嫁がせる
頼母子へ主人の知らぬ判を捺し
頼母子を掛け運勢を見て貰ふ

席題 飛行機 小西落丁選

電報を握つて旅客機に揺られ
訪日機隣から来たように着き
日本機で要人無事に歸還する
航空路地圖はあつさり線を引き
飛行機の音に友軍力づき
飛行機を知らないやうに立話
橋迄は飛行機逐つて男の子
富士山の胸のあたりを編隊機
飛行機で大陸に肩書を持つ
號外を手に飛行機を見上げられ
煙突を目當飛行機教へられ
遊園地飛行機丸く舞ひ上り
愛國機操者の顔が引締り
飛行機で来たほとんどの話なり
不時着は動せぬ色で機を降りる
編隊機銃後を安心させて飛び
物干の人に飛行機教へられ
逃げ伸びる敵機の音を遠く聞き
命名が済んで献納飛んで見せ
飛行機が来て子のきげん直さ
我が父の飛ぶ飛行機へ旗を振り
飛行機の影が通つた靄席
日の丸の翼へトチカ靜なり
戦闘機戦機之餘憤撃ちつくし
銀翼のその日の丸を見上げる日
プロペラの音にも空爆歸りなり
抜け目々日の丸出すゴンドラ機
立たされた子だけ飛行機な
旅客機の無帽の人が記事となり
日本の飛行機が飛ぶ日本晴れ

宮岡白峯君(南支)は桃が咲

いた、陣中で千句をものしたい
となか／＼の氣焔、その元氣ぶ
りはうらやましい限りだ。
▼月原啓明君(北支)は軍務公
用で某日北京へ出張、僅か一時
間ほどの時間を割いて、和田黙
然人君を訪問、同君の好意ある
もてなしに感激して來られまし
た。
▼和田黙然人君(北支)「ナニワ
ホテルを經營してゐる同君から
月原啓明君の來訪をよるこんで
來られた。まだ忙しいので北京
川柳會へは顔出しをせぬといふ
たより。
▼酒井美知夫君(南支)十二月
に梅が咲いたのに又二月にも咲
いてゐるといふ面白い便りが次
ぎ／＼に來る。
慶弔
▼市場没食子君(不朽洞會員)
の留守宅では二月八日に令嬢晴
子さんを喜ばれた。
▼林幹(己喜)君(岡谷市)が二
月十六日午前九時三十分永眠さ
れた。謹んで悼む。
▼小田五連發君(廣島縣竹原町)
が二月十八日幽明境を異にされ
た。お悔み申上げる。
▼本社賛助員岡本一平氏夫人岡
本かの子女史は昨年來心臓病を
病み自宅で療養中病勢悪化東大
分院で死去された享年四十七、
謹んで悼む。
▼澤田四郎作氏の令聞は三月十
四日朝永眠された。謹んでお悔
み申上げる。
轉居
▼鳥生古弗君(不朽洞會員)は

大阪市西淀川區海老江町中一丁

大改號

澤田粒子君は本名升夫と同音の萬壽於

土居頑童君は大阪市北區北扇町四七へ。

湊刀庵君は名古屋市西區南押切町六丁目三四へ。

改號

ルビビサ

社會式株酒麦本日大

社告

左記の諸君が三月一日から不朽洞會へ入會された。

寺井鏡々君
田中雨月君
平佐平三君
橋本波夢造君
藤岡至馨瑠君
増元翠陽君
田邊由布君
酒井斗風君
天野卜居君

各地柳

いのちある句を創れ

本社二月例会 (大阪)

二十一日午後六時 於 誓得寺

出席者(順不同)

路郎・白面人・孤蓬・頑童・默平・万的・潮花・紫香・水客・寄與史・鮎美・かはる・二南・成馬・連城・吞水・斗風・松太樓・緑雨・ライト・八九満・申仙・四路平・夕鐘・紅多呂・一笑・いさを・青兒・夢裡・里十九・豆秋・霞乃・アイト・丁字樓

兼題「赤 鰯」

路郎選

赤鰯襖の外で待たされる 二南
赤鰯なんのかんの子澤山 八九満
赤鰯子供の年を忘れかけ 水客
叱られて喰べさせられた赤鰯 八九満
赤鰯一つ残してめしがすみ 緑雨
赤鰯二月の旅の膳につき かはる
赤鰯重荷下した箸をつけ 万的
赤鰯丁稚の分は後になり 富士
赤鰯冷たき朝の膳に寄る 二南
赤鰯今日は變つた膳で食べ 白面人
丸鬚に結はせて焼かす赤鰯 鮎美
赤鰯もう箸箱へ箸を入れ かはる
(秀)昔ほど雪も降らない赤鰯 四路平
兼題「女店員」 鮎美選

規清稿投

用紙は原稿用紙又は投句箋の事
文字を正確明瞭に記載のこと
開催月日及場所記入のこと
締切は毎月廿五日とす
投稿先は本社宛

理整秋豆・郎路

屋上で雲を見てゐる 女店員
ねんねを着せかけてやる 女店員
女店員のメロンを買ふ日かな
(人)女店員カールの上に濕布して
(地)無口ではあるが氣の利く女店員
(天)パン包むのにくたびれる女店員
(軸)片戀となる唇紅き女店員
女店員の瞳にすいこんだヴァラエテ

席題「阿 呆」

五 選

(二點)大馬鹿野郎とアホに叱られた
氣の弱い男は阿呆やなと云はれ
阿呆やおまへんけどと親心
驛の名をスラスラ阿呆云つてのけ
同情の言葉を阿呆聞き違へ
通勤の朝を阿呆に又出會ひ
ほんとうの夢を見てゐるたいこなり
阿呆にして貰ひ氣樂に世を送り
團服の阿呆が酒を配らされ
趣味と云ふ事が人から阿呆に見え
よいとこへ来た阿呆をすぐ使ひ
あつさりと阿呆大きな方をくれ
阿呆やなと後から氣付く氣ののろさ
阿呆言ひく芝居裏へ来てしまひ
霜の朝阿呆は雀をかぞへてゐ
偉大なる阿呆で終つた靈柩車
(二點)惚る居る事世間阿呆と云ひ
散髪も風呂も阿呆は好きと云ふ
人生の阿呆大きな家を建て

豆秋 松太樓
斗風 四路平
いさを 鮎美

せつばつまつて娘阿呆と逃げ
阿呆な子の腫蝶々追ふてゐる
阿呆だけが知つてゐる話皆で聞き
寒うない様子阿呆はうらやまれ
(五點)持てる持てる氣嫌のよい阿呆

席題「高射砲」

八九満選

高射砲のはたで故郷へのベンをとり
高射砲猷納とある空が晴れ
高射砲おんなじ様に覗かれる
高射砲だと云ふ聲の安心
肉眼で見えぬのも打つ高射砲
高射砲あゝ浦塩は遠からず
高射砲眞面目な顔に圍まれる
高射砲あたりまつかと尋ねられ
高射砲おもちゃのように扱はれ
太陽を射抜く姿の高射砲
高射砲据えてデパート無事な晝
高射砲兵隊さんの腕はさえ
青空へ大きな口の高射砲
(佳)陸軍は高射砲なんかめてゐる
國境の雲にむいてゐる高射砲
(秀)高射砲撃つべき時に撃つ構へ

席題「せんざい」

いさを選

せんざい屋満員彼岸の鐘が鳴り
面會の母とせんざい食べる酒保
せんざいをきれひに食べて笑はれる
塩辛いせんざいの出る第一線
子を連れて来てせんざいの灯を
せんざいに夫婦の年は二十代
せんざいをおごつた仲居バスに乗り
せんざいは大阪らしい味をみせ
せんざいの箸を元氣な手に渡し
せんざいを食べて着替へて居る若さ
せんざいへ三日月さんが一寸出る
(佳)栗せんざい浅草の灯に迷ひかけ

斗風 松太樓
二南 斗風
紫香 斗風
紫香 斗風
二南 斗風
紫香 斗風
二南 斗風

看護婦同志せんざいに話する
看護婦に花の名を聞く恢復期
キング読む看護婦に夜があける
看護婦の言葉に尖る程疲れ
裏口に立つ看護婦に見送られ
よく寝る隙へ看護婦便り書く
(佳)看護婦は廊下をすべる様に来る
冗談が云へて看護婦よく笑ひ
看護婦に笑ふ話をして貰ひ
看護婦の認印を押した午前二時
看護婦に笑はれてゐる小さい疵

幽 靈 (相撲吟)

幽 靈

幽霊の話離れが遠すぎる
子を抱いて出る幽霊はみじめなり
幽霊のメイキヤツプがうますぎる
ゆうれいが出る踏切の噂なり
幽霊に肩たたかれた樂屋裏
早變りする幽霊の眼のうごき
幽霊を出す音へ撥持ち直し
幽霊に會つたと云ふた色男
儲かつた顔幽霊に見詰められ

豆秋 松太樓
紫香 斗風
連城 斗風
青兒 斗風
水客 斗風
松太樓 斗風
紫香 斗風
松太樓 斗風
紫香 斗風
松太樓 斗風
紫香 斗風
松太樓 斗風

看護婦同志せんざいに話する
看護婦に花の名を聞く恢復期
キング読む看護婦に夜があける
看護婦の言葉に尖る程疲れ
裏口に立つ看護婦に見送られ
よく寝る隙へ看護婦便り書く
(佳)看護婦は廊下をすべる様に来る
冗談が云へて看護婦よく笑ひ
看護婦に笑ふ話をして貰ひ
看護婦の認印を押した午前二時
看護婦に笑はれてゐる小さい疵

幽 靈 (相撲吟)

幽 靈

亡き友の名にふとふれた名刺入
素通りの軍用列車を母は待ち
四階は呉服さつさと通り抜け
素通りをしたと東京から便り
漢口に海老も届いた年の暮
海老も角も海老のついでに伊勢の宿
海老跳ねて板場の下駄にふまれそう
一區切夜鳴うどんを呼びに出来る
素うどんへ寝巻が一人起きて来る
交際の廣いが妻の氣に入らず
交際の酒にゆられる終列車
交際がうまく聞き手に廻つてゐ
交際ははてなと思ふ名刺あり
交際の酒が昔の疵にふれ
紙一枚返して本家さり氣なし
モーニングで出版社からださし勝ち

第一回研究句會

一月二十五日 於 大鐵クラブ

釣銭、酒、電燈、茶碗、ノート、笑ふ
使ひの子釣をしつかりにきらされ
釣銭がポケットにあるコップ酒
一ぱいのお酒に今日を感謝する
地下足袋のみな強そな屋台酒
大の字に今日の疲れを酒に寝る
笑ふての課長に近い酒の席
いゝ景色酒もひつそりする所
凡人にたゞ有難い酒の味
四疊半十六燭の影が出来
元通りならぬ茶碗を又觸り
お茶碗へ流しの灯ほのぐらし
頭字で書いたノートをあやしまれ
子の豫習父々として肩が凝り
廻禮へいさゝか肩が凝つてくる
木の枯れた庭を見てゐる肩の凝り
カメラ班大きな笑ひ撮つて来る
初對面 マッチを借りて笑ふなり

川 鶴町支部句會 (大阪)

一月十九日

於上山よし居
加藤ライト報

運命、相撲、謄寫版
運命に逆らひがちになる若さ 松太樓

辨當箱抱へ運命悲觀せず
運命のまゝに酌婦は三味を弾き
淋しさはふと運命にふれて来る
子の相撲父が行司になつてやり
逃げまわるやうに行司の立ちまわり
お互の趣味を綴つた謄寫版
急告の文字が大きい謄寫版
クラス會春がきてゐる謄寫版

川 天王寺支部句會 (大阪)

妹尾八九滿報

相撲、出動、終電車
戦線の相撲に勝つた便りくる
五人抜きいきなり足に組みつかれ
土俵ぎは残つた聲に力入れ
三役になつて土俵へ夕日さし
土俵へ出るまでは焚火にあたゝまり
出動の僕の靴音アスファルト
まだ五分出動前の新家庭
催促は出動先へ追つてくる
出動は別なタイプで行く女給
出動も非常時歩く事にして
出動にあれもこれもと世話をさせ
ア、漬で出動をする妻の留守
終電車向ひの客は顔馴染
やれ／＼と乗つて疲れる終電車
一本のつもりが／＼終電車
都々逸がいつかねて居る終電車
終電車時局にすまぬ顔もあり
終電車もう沿線は夢のころ

川 廣島句會 (廣島)

一月二十日

於 廣鐵俱樂部
眞下麥作報

銀貨、夜業、花嫁、建設、動く
銀貨一つプランも出来ず寝てしまひ
銅銭の中に銀貨が一つだけ
有難う按摩銀貨を撫でて出る
これきりと母は銀貨を一つ出し
無難作に八百屋銀貨をつかみ出し
二つ三つ銀貨が光る露天店
預金帳銀貨一枚だけ残り
社會鍋銀貨の音を立てゝ落ち

銀貨の繪大きく書いた特賣場
腹かけの銀貨その日の汗がする
脱線に今夜も夜業としらばくれ
夜業してまで國債を買ふ氣なり
夜仕事へ世話女房の熱い風呂
夜業の灯臨時ニユースが掛つて
追ひ詰めて今は夜業へ手が伸びる
子の寝顔見とどけて母灯を下ろし
紙袋部屋中になり夜業了へ
非常時の夜を染めてゐる鎔鑄炉
神殿に花嫁何か誓ひ居り
高島田くづして主婦の日課決め
丸醬に塵一つあり新世帯
花嫁のいゝ體格をさゝやかれ
花嫁の香も日本の高島田
建設の意氣高らかに鉄を取り
大陸の朝へ高し建設譜
町内が寄り建設に揉めて居り
建設の顔に決意の色が見え
建設へ先づ神主の意見聞き
捨石になる氣雄々しく支那へ發ち
建設に行く足並にある力
建設へ銃後の力鐵を取り
建設へ正義の鐵が牙えてゐる
建設のこゝにも菊の眞盛り
黎明はまづ建設の上に映え
建設へ行く船脚が速いなり
金持ちと聞いて心がちと動き
正眼に構へじり／＼動き出し
大阪城動くとも見えぬ石を積み
動く子を寫眞屋馴れたあやし様
動いてはならぬお灸へ反り返り
動くだけ動いて見ても落付けず

川 竹原支部句會 (廣島)

松井可笑報

眉、十二月、賣出し、餅、約束、引越、
落葉、近所、秋風、餅、質、顔、仲、吉
報、風呂敷、二階
必死の眉へ勝利は約される
日めくりへ追われる様に縋る晴着
掛取へ座布団がある十二月
特價品眼鏡越しからつりが来る

餅を揚ぐ音は銃後の力です
年の數難煮を食べた子の元氣
人間のする約束へ判がいり
引越の隣は高い門がまへ
引越へ父の姿の淋しさう
引越へ隠居萬年青を一人持ち
引越した日から子供は連れがあり
かさこそと落葉の音の迫る夜
銀杏散る庭に讀經の聲が洩れ
御近所へ來ましたと云ふ恐い顔
秋風が閑な喫茶の窓に吹く
街角で思はぬ顔とすれ違ひ
さゝやかな希望に明けたスラム街
ある日ふと自分の癖を見につけ
質札が哀れをそゝる遺留品
質草に昔戀しい品ばかり
質店ののれん意外な顔が消え
父さんの顔色だけで子は黙り
立話してゐる影の伸びて行く
十疊を狭く吉報取りまかれ
風呂敷をひろげて香具師の暖い
風呂敷敷が一つ大東京の夢
名刺には二階に居ると書いてなし

川 下關支部句會 (下關)

二月一日

於 林 苦笑居
多田市多樓報

繁昌、立話、入營、雪、素顔、初戀、接
繁昌に小僧不平がないのなり
新開地廻轉焼の賣れること
繁昌をうるさく思ふ子が育ち
繁昌のテリヤは奥につながれる
立話亭主は横であごを撫で
水道の水の出る間を話合ひ
立話なかを自轉車割つて過ぎ
良い體皆んなはめてる入營兵
入營を祝ふ門出へ鶏の聲
入營の朝鶏の聲は澄み
願かけに吹雪いとほす孫のため
厚化粧一風呂浴びて年を知り
初戀の想ひ出となる丘の上
人の戀聞いて我が身も人戀し

昇り着いたエレベーターは洋食部
柳路

喜びを抱いて郷里へ去る苦力
白^{バイチ}酒^{ユウ}にホームシツクもある苦力
飛ぶ燕苦力列車のもう来る日
桃水 漫蹠郎 同

大阪市住吉區
帝塚山中三丁目

辨髮の苦力黙々よく稼ぎ
 苦力ふと自分の年を考へる
 賭け事をしてゐる苦力へ黄昏る
 知る人と聞いてあはてるコンバクト
 口説くをしらはたくコンバクト
 姐さんのおのろけを聞くコンバクト
 幕合へパチンとなつたコンバクト
 大掃除此んな所にコンバクト
 誘惑されてゐるとは知るコンバクト
 コンバクト嘘の話も知つて居る
 コンバクト一人淋しく泣いた顔

松代
 柳路
 同
 福壽草
 福柳
 桃水
 漫蹠郎
 松代
 同
 柳路
 同

早打の馬は足だけ撮される
御主人の機嫌に合はす馬の足
戦死馬へ勇士も舉手の禮をする
占領に愛馬をだいて聲もなし
殊勲をも知らず愛馬は息を引き
いなゝいて軍馬御國をたつて征く
その鼻に一喜一憂競馬場
馬よ馬昨夜ぐつすり眠れたか
騎兵隊馬に突貫してもらひ
斯ナド答ふるものは彈丸の雨

栗
たけ
利
淺
同
君
同
柳
同
坑

葉	たけを	利生	浅女	同	君女	同	柳秀	同	流川
行き先きを云はずついて来い	行き先を信じて妻の無事な顔	重役さ行き先云へぬ事もあろ	先々電話でおへど捕へ得ず	行き先をフト變へさした春の風	行き先きを聞けば女は笑ふのみ	行先をしやべつて丁稚叱られる	行先を訊けば顔をしやくるだけ	行先はとも角阪急前で待ち	満洲とだけで行先言はぬなり
柳秀	同	山彦	同	葉	柳秀	葉	同	春集	同

行き先きは女の方が決めて呉れ
お酒飲んでからが行先ばやけて來
行先を言つて出た日は飲み過ぎる
南向ひて出やはつたとだけは知つてゐる
行先はしれてゐますととり合はず
行先を八卦に聞けば酉と出る
行き先きを女にまかす金を持ち
行き先を運チヤンはもう眼で感じ
行き先を訊くなと母に教へられ
宗右衛門町それから先は知らぬなり
行き先で待つは胸息ばかりなり
行き先を云はずに出たが香具師に立ち
行き先は風船の如く風のまに／＼

柳秀 方正 春巢 同 春巢 柳秀 路郎 同 同 同 同

石崎柳石氏を迎へて

於廣鐵俱樂部

俠氣、運勢、一、軍都

俠氣を出して巡查にひつばられ
俠氣は女の前で見せるもの
俠氣は大きな聲もして見せる
俠氣の一人が凄顔となり
俠氣の主は名前も告げず去に
十銭は矢張り十銭らしい易
大吉を持つて歸つて母に見せ
大吉と出た運勢にある不安
凶と出て又一本を引き直し
運勢へ片手が寒いまゝで立ち

石原
葉留路
久米雄
草雲子
麥作
秋史
かなめ
柳石
昨日
紫浪

澤田久米雄報

一切を呑み込んだ氣の妻楊子
均一を撰るに女の脇と脇
一聲を鳴かすにラチオ手間がとれ
ラッパから軍都の朝は明けそめる
柳石
葉留路
柳石

有恒川柳會 (大阪)

一月二十四日 於有恒俱樂部

將棋、橋、牛肉

ムツとして見れば社長の助言なり
桂馬があればとおしそに駒をなげ
宿直は將棋が出来て引受ける
社長今日御氣嫌也將棋のぞく
團體の將棋盤まで持つて乗り
二盤目の將棋へ風呂が湧き過ぎる
海水着のまゝで將棋へ口を出し
下戸の客待つ間に將棋盤を出し
アパートの將棋帳場で借りて来る
初王手脂の浮いた角でする
勝將棋一寸煙草を輪に吹かし
段近しい扇子など持ちたがり
モー一丁銀があればと悔しがり
かつらがありませんと娘髪を切る
丸鬚の型を叩いて叱られる
鬚ぬいでお辭儀をしてる樂屋裏
淡雪を拂ふて鬚の艶やかさ
扇風器あたため程に鬚は座し
節分に初めて知つた鬚の型
パスのなか鬚が氣になる時代なり
軍務公用切つた丁鬚握り締め
顔は顔かつらはかつらうば櫻
どの鬚と離段の方振り返り
女店員正月三日だけの鬚
不美人を褒めるには髪か鬚でする
肉鍋へ碧眼の大使あぐらかき
肉鍋と知つて子供はもう座り
すき焼は考へぬいた上の菜
隣りまで牛肉なりと知れちまい
牛肉の切れるを後ろ向で待ち
せちやく牛肉の値にはんば付き
牛肉屋から料理屋へ年をとり
子供等のつきあひにまた肉を喰ひ
牛肉のなべへ親しい箸をのべ
コマギレが眞の味だと書生部屋

満洲へ行く送別は肉のすき
牛肉をついた友と思はれず
二月七日
五圓札、出鱈目、アパート
五圓札本に挟んで三日過ぎ
ゾボンから出す鐵茶な五圓札
女房に手頃な五圓札であり
五圓様々はちをかゝずにすみました
京までと腹から出した五圓札
手觸りは五圓札もお辭儀する
開きたきは五圓の札の抱く秘話
五圓札あつたばかりに馬をつれ
五圓札貧者の一燈差し出し
五圓札拾つて罪を重ねたり
大學生の息子一聲五圓なり
月末に五圓はつきり物を言ひ
献金は脂のにじむ五圓札
五圓札スカシテ見る煙草店
五圓札意見が一致せぬ競馬
奉公に來て初めてもらふ五圓札
出鱈目な妓で小綺麗に住んでゐる
出鱈目な豫言に山へ孔を明け
出鱈目の高座戻れば子が五人
出鱈目なだか華やかな戀なりし
出鱈目が通り心配ふえて居る
出鱈目な男と知つて又かゝり
出鱈目な名でも支那の子返事する
出鱈目な様で盛花流儀あり
出まかせに言ふた名の人二階に居
出鱈目の話本當になりそうなり
出鱈目も二三度許す親心
出鱈目を神のお告げと言ひ振らし
出鱈目七分マンザイだけでなし
出鱈目を並べてあとは怖くなり
出鱈目なくらしやつぱり良い生活
出鱈目に吹く口笛も春のもの
出鱈目が奇縁となつた事もあり
アパートの雨階段が濡れてあり
出世してアパートのころなつかしむ
アパートは寝るだけと銀座歩いてる
アパートと言ふだけで女寄せつけず
アパートに未來の社長夢みて居

中年のアパート住ひ羨まれ
アパートを目當てに家を教へられ
アパートの何處かでパンを焼く臭ひ
アパートへ親父新嫁つて來る
松坂俱樂部句會 (大阪)
一月九日 戸田孤蓬報
書初め、朝陽映島、松の内、皿
書初めへやはりの筆がよし
姉は萬葉弟は詩書の筆初め
書初へ祖父は異議なくほめてやり
書初めを思ひ子に買紙はさみ
島の朝胸一ぱいの息を吸ひ
鶏が島でも告げた初日の出
島の朝空は聖職へ續く空
朝陽が鰯に女房に島に映え
松の内久方振りに子の相手
松の内袴にいやな癖がつき
松の内いつ迄煮しめ喰はす氣か
松の内小僧サツサと店を閉め
思ひ出し笑ひ課長の松の内
松の内さら／＼サツと茶ですまし
松の内干支の玩具も一つ買ひ
松の内もう借金の話が出
灰皿もさすがどつしりした生活
皿敷も運び社長は立ち上り
冷えきつた皿にこまめが冷切つて
皿一つ壹百人の生活費
立志傳皿洗ひの一幕もあり
皿小鉢が揃つた頃は倦怠期
二月五日
夕刊、子澤山、バスガール、イミテーシ
ョン、二部興行
悪友を逃れ夕刊一人讀み
夕刊は初手から下足包む腹
唱歌うたう聲で夕刊賣つて居り
相場欄だけの夕刊二つとり
夕刊屋なじみの客は後で出し
夕刊に聞けば父ちゃん北支やわ
平凡な生活夕刊まつてゐる
夕刊が一家三人たてすごし
夕刊を賣る兄の外は歸路につき
待ち呆けの眼に夕刊の賣れること

湯上りの夕刊目鏡ふきなほし
釣革の隣おもしろい赤の記事
戦ひはこれからですぞ子澤山
子澤山どれなりと何とかなりませう
子澤山やつと母ちゃん飯となり
子澤山下界の隅にそつと生み
従容として子澤山またはらみ
外三人は戰地に居ますと子澤山
長男は五男をおうてハイキング
子澤山末子の後に五人出來
電車から集めて下りる子澤山
子澤山我子の年は知つてゐず
子澤山税金の様な藥代
お茶菓子の土産が足りぬ子澤山
順々に服が間に合ふ子澤山
留雄、末子まだ出來そうな腹である
母の手のしなびて光る子澤山
人様の方が心配子澤山
番號にすればよかつた子澤山
子澤山切符一枚取られてゐる
長男と親子の様な子澤山
續くバス女車掌を選つて乗り
バスガール赤い守りを見つけたれ
バスガール話は別の聲でする
板について來た頃車掌様になり
女車掌あれで只乗り見逃さず
新ダイヤなどもにせ物うまいこと
ターミナルイミテーシオンが待てる
イミテーシオン知つての上の道樂さ
三日目にやつぱりはげた眞珠です
イミテーシオン以外な所でも
栖鳳の軸が懸つた安旅籠
教授連二部興行で喰つてゐる
午後三時もう夜の部の人の列
五郎チト二部興行に格が落ち
顔見世も二部興行の御時世だ
畫の部は女が多い大歌舞伎
お家はソファで夜の部待てる
畫の部のよさはあの妓が云ふてくれ
畫の部を見て夜の部も見ると決め
夜の部に心残して千秋樂となり
千日で畫の切符を安く買ひ

胃酸過多症・胃痛に

ホルモザン錠

ノルモンザン錠の治療生用は、服用後先づ
胃の粘膜を保護し、次に分解して
過剰な胃酸を中和し、或は分泌腺を収斂して
胃液の分泌を抑制するにあり。又本剤は
ロートエキスの配合により胃痛を緩解す
【主治効能】 胃酸過多症、過飲、胃痛、
胃潰瘍、胃痙攣、便秘、惡酔、二日
酔、飲み過ぎ等

（例）一日4錠（二日分）を2錠（一週間）（二週）
（三週）（四週）（五週分）（六週分）（七週分）（八週分）（九週分）（十週分）（十一週分）（十二週分）（十三週分）（十四週分）（十五週分）（十六週分）（十七週分）（十八週分）（十九週分）（二十週分）（二十一週分）（二十二週分）（二十三週分）（二十四週分）（二十五週分）（二十六週分）（二十七週分）（二十八週分）（二十九週分）（三十週分）（三十一週分）（三十二週分）（三十三週分）（三十四週分）（三十五週分）（三十六週分）（三十七週分）（三十八週分）（三十九週分）（四十週分）（四十一週分）（四十二週分）（四十三週分）（四十四週分）（四十五週分）（四十六週分）（四十七週分）（四十八週分）（四十九週分）（五十週分）（五十一週分）（五十二週分）（五十三週分）（五十四週分）（五十五週分）（五十六週分）（五十七週分）（五十八週分）（五十九週分）（六十週分）（六十一週分）（六十二週分）（六十三週分）（六十四週分）（六十五週分）（六十六週分）（六十七週分）（六十八週分）（六十九週分）（七十週分）（七十一週分）（七十二週分）（七十三週分）（七十四週分）（七十五週分）（七十六週分）（七十七週分）（七十八週分）（七十九週分）（八十週分）（八十一週分）（八十二週分）（八十三週分）（八十四週分）（八十五週分）（八十六週分）（八十七週分）（八十八週分）（八十九週分）（九十週分）（九十一週分）（九十二週分）（九十三週分）（九十四週分）（九十五週分）（九十六週分）（九十七週分）（九十八週分）（九十九週分）（百週分）

町修道市大 店商衛兵長田武 式繪 元寶獸
(三一第日市大 店商不無)

菊正宗



本嘉納商店 株式會社

店商納嘉本 會社 株式

白鶴



のた
めに

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の牧縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

樹林醫學博士 推獎
片瀨醫學博士 監査

片岡醫學博士述
「安産のために」冊子品上

ブタカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店



にきびとに

美顔水



ニキビ

吹	に	此
出	ぜ	薬
物	と	を

ニキビ吹出物に非常によく効きますので
大評判の薬です。ぜひお励めしたい薬！

美容薬としても

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるととても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増しお顔がスツキリと美しくなるので美容薬としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其の他毒虫でカユイ時にもとても便利な薬！

化粧用 美顔水

ア	の	粧	最
ブ	お	下	適
ラ	化	に	！
顔			

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 毎月一冊十部發行
昭和十四年三月十日印刷 昭和十四年三月十五日發行

川柳雜誌

NO. 182

定價金 30 錢 送料 壹錢